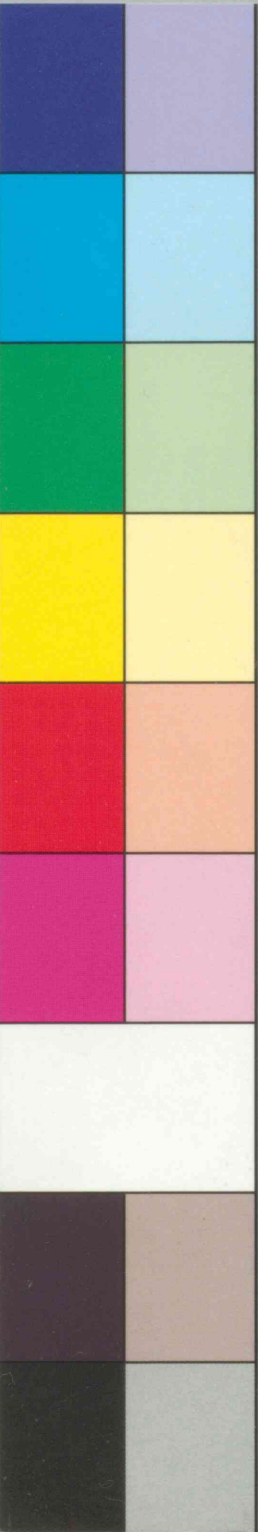


新體

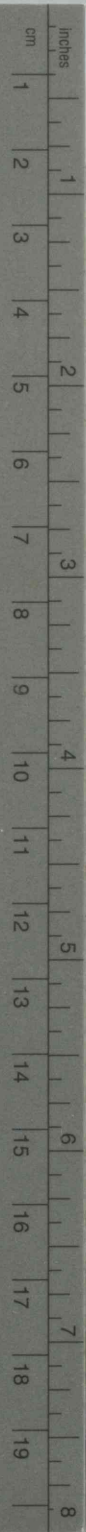
日本文學史教科書

藤岡作太郎著
藤井乙男補
全

375.9
Fu10
資料室



Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak



42608

教科書文庫

| |
|----------------|
| 4 |
| 810 |
| 51-1928 |
| 20000 26340 |



資料室

375.9

齊定檢省部文

用科語國校學範師 日三十月四年三和昭

Fu 10

用科文漢語國校學中 日七十二月二年八和昭

文學博士藤岡作太郎著
文學博士藤井乙男補

新體 日本文學史教科書

東京大學
圖書印

株式會社 東京開成館藏版





源氏物語繪卷
(藏氏親義川德爵侯)

増訂について

藤岡氏の新體日本文學史教科書は、敘述の簡潔にして要領を得たるを以て好評嘖々たりしものなるが、故ありてこれを絶版したり。然るに、最近に至り諸學校より本書の刊行を促す聲頻繁なるを以て、今回新に數項を加へ、その他にも多少の修正を施して世に出すこととせり。

昭和二年十月

藤井乙男識

一、この書は師範学校の日本文學史の教科書にとて綴れるものにして、嘗て刊行したる新體日本文學史教科書を更に修訂したるなり。
 一、大體の結構に於ては從來の新體日本文學史教科書に異ならずといへども、ところ／＼これを修正し、また々々その量を縮小したり。前書も簡明を主としたれども、少き時間にてはそれにておなほ教へ残ることなきを得ず、長きに失せんよりは寧ろ短きに過ぐる方、教授者に敷衍の餘地を與へて實際に便利なりと思はるゝを以て、更にこの修訂の書を出せるなり。

凡例

一、この書は師範学校の日本文學史の教科書にとて綴れるものにして、嘗て刊行したる新體日本文學史教科書を更に修訂したるなり。
 一、大體の結構に於ては從來の新體日本文學史教科書に異ならずといへども、ところ／＼これを修正し、また々々その量を縮小したり。前書も簡明を主としたれども、少き時間にてはそれにておなほ教へ残ることなきを得ず、長きに失せんよりは寧ろ短きに過ぐる方、教授者に敷衍の餘地を與へて實際に便利なりと思はるゝを以て、更にこの修訂の書を出せるなり。

一、なほ上欄に注意すべき事項を挙げたれども、時間の都合にて
 教授の際取捨して可なり。
 一、時代を五大期に分ち、明治の外は更に各期を四小期に割きた
 る、また時代の分割も記憶に便ならしめんがため圓數により
 たるなど、前書に同じ。

明治四十年十月

編者識

目次

總論

| | | |
|-----|---------|----|
| 第一章 | 太古 | 三 |
| 一 | 神代以來 | 四 |
| 二 | 漢學公行以來 | 八 |
| 三 | 佛教傳播以來 | 一〇 |
| 四 | 奈良朝 | 一三 |
| 第二章 | 平安朝 | 二二 |
| 一 | 弘仁時代 | 二四 |
| 二 | 延喜天曆時代 | 二九 |
| 三 | 藤原氏全盛時代 | 三五 |
| 四 | 院政時代 | 四四 |

第三章 鎌倉室町幕府の世……………五

一 鎌倉時代……………五

二 吉野朝……………六

三 室町時代……………六

四 戦國時代……………六

第四章 江戸幕府の世……………七

一 寛永時代……………七

二 元禄時代……………七

三 寶曆前後……………七

四 文化文政時代……………七

第五章 明治大正の世……………一〇六



新體 日本文學史教科書

文學博士 藤岡作太郎著
 文學博士 藤井乙男補

総論

文學とは何ぞや 文學は人の思想感情を美はしく文章の上
 現したるものにして、進んでは人生の祕奥を開かんとするもの
 なり。

國民文學史 一國にはその國民に固有なる思想感情あり。そ
 の國の文學はこの特質を發揮す。なほ一時代にはその時代の
 特質あり、文學者には個人の特質あり。一國の文學史は此等を

舉げて説明批評し、その變遷の由來を究む。日本文學史の文學史の基礎とせる文學が、各時代に於て如何に推移し、諸大家によつて如何なる異同あるかを究むるものなり。此等の變遷は内政の治亂など種々の影響を受けしといへども、殊に感化の強かりしは儒教と佛教となり。我が國民はその本來の思想感情にこの東洋の二教を融化し、近くはまた西洋思想を移植せり。かくして東西兩洋の文學を以て培はれて、將來の日本文學はその幹ますく太古その枝ますく茂らんとす。

日本文學史序

第一章 太古

太古の文學 神代の年歴は知るべからず。建國より奈良朝の末に至るまで、年を経ること千五百年に近しといへども、文學の發達は甚だ遅く、常に單純にして素樸なりき。海外の文物も移植せられたりといへども、その影響は未だ著しからざりき。自然と人心 國民の氣風はその國の氣候地勢によりて養はる。日本の本州が溫暖なる地位にありて、山水極めて明媚なるを思へば、我が國民が自然の景物を愛し、快闊の氣に富み、峻酷の風なきも偶然にあらざるを知るべし。進取敢爲の性を備へ、雄壯にして武事に勵み、勤勉にして清潔を尙ぶもまたその特質にして、太古の文學はよくこれを現せり。

一 神代以來

○「九〇〇」は神武

天皇御即位紀元を示す。以下これに同じ。

○當時の歌謡は古事記及び日本書紀の中に散見す。この書のことは後にいふべし。

この時代の文學 太古我が國には文字なかりき。或は神代文字といふものありきといへども、これを以て記したる文學的作品は存せず。この無文時代に後世の如く發達したる文學は望み得べからずといへども、歌謡傳説祝詞壽詞の類は既に存して、口より口に傳誦せられ、後人の筆に録せられたるあり。此等によりてほゞこの時代の文學を窺ひ知ることを得べし。歌謡 歌謡は形式未だ定まらず、一句の字數も限られず、短歌長歌の別も明かならず、たゞ相互に長短の句を交ふる風は始より存したり。疊句對句を用ふること多きは、記憶に便ならしめんがために生ずる無文時代の通習なり。何れも物に觸れ事に感

じておのづから聲調の整ひたる言語をなすものにして、述ぶるところ天真爛漫に、抒情を旨として、敘景詠物の作は極めて稀なり。作中に見ゆる鳥獸草木は、雉・鴨・鹿・猪・蘿蔔・蒜・桑・栗の類多く、その歌に入るは美なるがためにあらず、偉なるがためにあらず、日常觸れ易きがためのみ。傳はるところの歌謡、概ね國民が空想に耽らず、實際を尙ぶ風を現せり。

神武天皇が長髓彦を討ちたまひし時の御製

みつゝし、久米の子らが、粟生には、か葦一莖。其根が莖、其根芽繋ぎて、討ちてし止まむ。

日本武尊一つ松のもとにてよみたまへる歌

尾張に直に向へる、尾津の崎なる一つ松、吾兄を。一つ松、人に

ありせば、太刀佩けましを、衣着せましを、一つ松、吾兄を。

○傳説は古事記・日本書紀により

て知るべく、風土記の中にも散見す。風土記のことまた後に見ゆ。

○祝詞・壽詞は大抵延喜式(卷八)に出づ。延喜式は醍醐天皇の朝に撰せられたり。此等の祝詞・壽詞の最も古きは神武天皇の時既に存せりといふ。それにも後人の潤色あるべく、その他後世の作も多かるべけれども、何れもその體裁古風のまゝを存せり。

傳説

神代の傳説は、國土の成立、天神の經世、天孫の降臨など、概ね帝國の起源、祖神の偉業を述べ、萬世一系の國體、忠勇無比の士風が、國初より堅く人心に銘せられたるを示せり。

祝詞・壽詞

祝詞は神に申す祭文なり。我が國民は分けて敬神の心深く、國初の政は即ち祭政一致の制なれば、事毎に神に祈り、その折には祝詞を讀み上げたり。祝詞の體は物によりて異同あれども、概ねまた天孫降臨、開國紀元の様より説き始めて、祈禱の意を述べ、種々の供物を捧ぐる由を申す。五穀豊かに、疫病息み、禍亂收まらんことなど、祈禱の主意にして、殊に國民が農耕を主として、風雨の和順を希ふ意はおのづからその中に現る。辭

を列ぬること樸實なりといへども、雄渾正大の氣に富みたること後世に比を見ず。壽詞も祝詞の類にして、朝廷の大禮、高貴の饗宴などに述ぶる賀詞なり。

祝詞大祝詞の一節

かく宣らば、天つ神は、天の磐門をおし披きて、天の八重雲をいつの千別に千別きて、きこしめさむ、國つ神は、高山の末、短山の末に上りまして、高山の伊穗理、短山の伊穗理をかき別きて、きこしめさむ。かくきこしめしてば、皇御孫の命の朝廷を始め、て、天の下、四方の國には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つことの如く、朝の御霧、夕の御霧を、朝風、夕風の吹き掃ふことの如く、大津邊に居る大船を、舳解き放ち、鱸

解き放ちて、大海の原に押し放つことの如く、彼方の繁木が本を、燒鎌の敏鎌もちて、打ち掃ふことの如く、遺る罪はあらじと、祓ひたまひ、清めたまふことを、高山の末、短山の末より、さくんだりに落ちたぎつ、速川の瀬にます瀬織津姫といふ神、大海の原に持ち出でなむ。かく持ち出で往なば、荒潮の潮の八百道の、八潮道の潮の八百會にます、速開都姫といふ神、持ちかゝ呑みてむ。かくかゝ呑みてば、氣吹戸にます氣吹戸主といふ神、根の國、底の國に氣吹き放ちてむ。かく氣吹き放ちてば、根の國、底の國にます速佐須良姫といふ神、もちさすらひ失ひてむ。

二 漢學公行以來

—九〇〇頃より一二〇〇頃まで—

韓國の影響 神功皇后征討の軍を發して韓國を服したまひしより、かの國來貢し、爾來海外の文物を輸入すること多く、國運の進歩頗る見るべかりき。

漢學傳來 應神天皇の十五年(九四四)百濟の阿直岐來り、翌年その勸によりて、かの國の博士王仁を徵したり。皇子菟道稚郎子との二人に學びてよく經義に通じたまへり。次いで阿知使主も來歸し、これより三人の子孫は代々文事を掌りき。

文學進歩の遲緩 かくて漢文世に行はれ、史官も設けられしかども、文教の發達は産業の如く著しからず、公文・官符の類にこそ漢文を用ひたれ、世人は文筆に疎く、なほ前代の状態を繼續し、海外文物の傳播も我が文學に影響すること少かりき。歌謡 この時代の和歌は毎句の字數漸く五七に傾き、短歌・長歌

○阿直岐は百濟國魯王の後といひ、阿知使主も百濟國の人なるが、後漢靈帝の曾孫と稱せり。

○當時の和歌も古事記・日本書紀の中に存し、なほ萬葉集にも散見すれども、數首に過ぎず。萬葉集のことは後にいふべし。

の別もや、立ちたれども、内容の單純素樸なることは前代と大
差なかりき。文學進歩の遅々たりしこと太古の世には已むを
得ざるなり。

三 佛教傳播以來

——一〇〇頃より一三五〇頃まで——

佛教の傳來 欽明天皇の十三年(一二二)百濟の使來りて佛教を
傳へたり。次いで推古天皇の朝、聖德太子その興隆に力め、併せ
て文運の進歩を計りたまへり。これまで公の海外交通は概ね
韓國に限られしが、こゝに至りて始めて使節の隋に赴くあり、遣
使の來往これより絶えず、學生、僧侶は伴ひて支那に留學し、唐代
の文藝を輸入せり。この刺戟に逢ひて、久しく潛みたる國民

○太子の編著に
は、その講説に
かゝる勝覺經疏
などあり。
金石文の現存せ
るものの最も古
きは、法隆寺金
堂の佛像の光背
の銘(推古天皇
の朝)、宇治橋の
斷碑(大化中)な
どなり。
この時代の詩は
懷風藻に出づ。
この書のこと
は次の時代にいふ
べし。

の智力は一時に發展し、制度の改革、服飾の制定、寺院の建築、美術
品の製作など、百般の事物は燦然として光彩を放つに至れり。
漢文學の勃興 唐代文藝の輸入と共に我が國の漢文學も勃興
せり。聖德太子が蘇我馬子と計りて始めて編纂したまひし國
史は、惜しむべし焼亡して傳はらざれども、太子の撰に成れる十
七箇條憲法は今に存して當時の漢文の程度を示せり。漢字に
て記したる金石文もこの時に至りて始めて見るを得べし。漢
文の習得せらるゝに従ひてまた詩賦の詠ありき。我が國の最
初の詩は、弘文天皇及び皇弟河島皇子の御手に成れり。
儒佛二教の影響 文運の發展は佛教の傳來實にこれが動機た
りき。かの憲法は治國修身の訓令にして、儒佛二教の旨を以て
倫理の大本とせり。されど、佛教の興隆は儒教を凌ぎ、工、藝、美術

○この時代の歌人は額田女王（ぬかだのおほきみ）最もすぐれたり。それらの歌また萬葉集に出づ。

の進歩など多くはその結果なりしなり。

和歌 和歌には儒佛二教の影響なほ極めて少かりき。されど、時勢の進歩はおのづから吟詠の間に現れ、國民の生活が餘裕を生じて典雅なる性情の荅を開きしを見る。

四 奈良朝

—一三五〇頃より一四五〇頃まで—

文學の進歩 大化の新政このかた、天智・天武二帝の政事に勵みたまふあり、國運の發達は文學の進歩を促し、持統天皇の頃より奈良朝にかけて、光彩煥發、太古の文學はこゝに絶頂に達して、後代と異なる一時期を劃したり。

國史地誌 文運大いに開けて、こゝに纏まりたる書籍の編著あ

○古事記は元明天皇の和銅五年（三三〇）に成れり。勅によりて太安曆（おほのやすまる）が舍人稗田阿禮（ひえだのあれ）の口演を筆記したるものなり。日本書紀は元正天皇の養老四年（三二〇）に成れり。舍人親王（とねりのみこ）を總裁として安曆等が撰せしものなり。風土記は和銅六年諸國に命じて撰進せしめたり。されど全く備はらざりしかば、醍醐天皇の朝に至りて更に督促せられき。

りき。中にも今日傳はれる我が國の最初の古典を古事記とす。この書は奈良奠都後間もなく成り、神代より推古天皇までの歴代の事蹟を述べ、文體は力めて國語のまゝに寫し、質實にして遒勁、神代の部は殊に興味多し。後數年、詔して更に詳確なる漢文の國史を編せしめられき。日本書紀これなり。また諸國の地誌の編纂もありき。これを風土記といひ、今僅に數種を存せり。多くは乾枯なる記事にして、まゝ面白き傳説を交ふるに過ぎず。

古事記神代の一節

故こゝに速須佐之男命申したまはく、しからば、天照大神に申して罷りなむと申したまひて、すなはち天に參上ります時に、山川悉に動み、國土みな震りき。こゝに天照大神聞き驚かし

て、我が弟の命の上り來ます故は、必ず善しき意ならじ。我が國を奪はむとおもほすにこそと宣りたまひて、すなはち御髪を解き、御髻に纏かして、左右の御髻にも、御髪にも、左右の御手にも、みな八尺の勾瓊の五百箇の御統の珠を纏きもたして、背には千篋入の鞆を負ひ、五百篋入の鞆をつけ、また稜威の高鞆をとり帶ばして、弓腹ふり立てて、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹶散かして、稜威の雄たけび踏みたけびて、待ちとひたまはく、など上り來ませると問ひたまひき。

體裁の具はれることは書紀まされりといへども、その漢文は古意を枉ぐる弊ありとて、識者は却つて古事記の國文を貴しとす。されど、古事記も意に害なきところは漢文體に作りてこれを訓

讀せしめたるもの、また風土記も大部分は漢文にて、時に國文を用ひたるものなり。

宣命 歌謠の外、太古の純粹なる國文は祝詞と宣命となり。宣命は天皇の百官庶民に宣りたまふ文にして、朗讀するがために國語のまゝに綴れり。古樸にして莊重なることは祝詞に似たれども、その調や、新にして、時に儒佛二教の影響を見る。

漢文學の發達 祝詞宣命などの國文を綴るにも漢字を假らざるを得ず、その他の實用の散文は概ね漢文を用ひたり。従つて漢文學益、盛にして、前代の末より詩賦を作るもの漸く多く、その作は載せて懷風藻にあり。懷風藻(一四二)は我が國の詩集の初なり。聖武天皇の頃には、吉備眞備安倍仲麿等唐に留學し、詩文ともにかの國の學士に比して恥づるところなしと稱せられき。

○宣命の今に存するもの最も古きは續日本紀の中に散見し、文武天皇の時より桓武天皇の時までのものあり。その以前のものは傳はらず。平安朝以來のものは漫に前者を模擬せるのみ。○懷風藻は淡海三船の撰といへども疑はし。眞備は文學を以て身を立てて右大臣に至れり。仲麿は歸朝の途に颶風に遭ひてまた唐に至り、かの國にて薨ぜり。

桂 豊

大 神

Handwritten notes in cursive script, including the characters '大', '神', and '神'.

に仕へたり。共に官位高からざりき。

○憶良は若くして遣唐少録となり、神龜の頃は筑前國司たりき。旅人は征軍人持節大將軍となり、太宰帥となり、從二位大納言に至れり。家持は天平中越中守となりて治績あり、持節征東將軍となれり。

用と共に國民の自信も固くなれり。人麿はこの時に出で、故人。舊都を追懷し、祝詞に倣うて屢開國紀元より詠じ出して、和歌に壯大の調を加へき。赤人は人麿に少しく後れて出で、自然の景物を詠むこと少からざりき。人麿は長歌に長じ、赤人は短歌をよくし、共に雄渾にして雅麗なること古今に超絶せり。當時漢學・佛教盛なりしかども、二人はその直接なる感化を受けずして、國民固有の性情を詠じたり。

その他の歌人 赤人と同時に山上憶良・大伴旅人あり、旅人の子に家持ありき。憶良は漢文學に通じ、旅人父子は共に武官なりき。憶良は人世を詠じ倫道を説き、旅人は恬澹無爲の言を弄し、家持は題を取ること廣しといへども、殊に忠君愛國の旨を詠じたり。何れも漢學・佛教の影響を帯び來り、思想はやゝ複雑にな

りたれども、その歌は到底人麿赤人の高邁なるに及ばざりき
この時代の和歌の特質 奈良朝の文華を最もよく代表せるも
のは萬葉集なり。神代以來培ひ來りしもの、こゝに至りて柳櫻
桃李の色を競ひ、殊に長歌はその比を見ず。和歌の内容は率直
なる感情をありのまゝに現して、浮薄虚偽の嫌なしといへども、
思想の單純にして變化少きことは否むべからず。げにや太古
文學の長所は内容よりも形式にあり。人麿赤人はこの點に於
て大成し、枕詞を置き對句を設けて歌調の莊重大なるは後世
の纖弱なる風と正に相反せり。人憶良等がこの二聖に及ばざる
は主としてその措辭の粗雜なるによれり。

吉野宮の長歌及びその反歌

人麿

やすみししわが大王、神ながら神さびせすと、吉野川たぎつ河
内に、高殿を高しりまして、上りたち國見をすれば、たゝなはる
青垣山の山神の奉る御調と、春べは花かざしもち、秋たてばも
みぢかざせり、遊副川の神も、大御食に仕へまつると、上つ瀬に
鶉川をたて、下つ瀬に小網さし渡し、山川もよりてつかふる神
の御代かも。

山川もよりてつかふる、神ながらたぎつ河内に船出せず
かも。

富士山の長歌及びその反歌

赤人

天地の分れし時、神さびて高くたふとき、駿河なる富士の高
嶺を、天の原ふりさけ見れば、わたる日の影もかくるひ、照る月
の光もみえず、白雲もいゆきはかり、時じくぞ雪はふりける。

語りつぎ言ひつぎゆかむ、富士の高嶺は、
田兒の浦ゆうちいでて見れば、眞白にぞ富士の高嶺に雪
はふりける。

當時の短歌の例

士あきやも空しかるべき、萬代に語りつぐべき名は立たずして、

憶良

いざ兒ども、香椎の瀨かきに、白妙の袖さへぬれて朝菜つみてむ。

旅人

たなばたし船のりすらし、まそ鏡清き月夜に雲たちわたる。

家持

第二章 平安朝

文學の貴族的傾向 平安朝凡そ四百年は、上代文化の最も光彩
ありし時代にして、江戸幕府の世と併せて、我が國に於ける文運
極盛の二紀とす。されど、上流の社會のみ發達して、人民の智能
は貴賤の間に大なる逕庭ありき。従つて百般の事物すべて貴
族的傾向を帶び、實用を忘れて粉飾に過ぎ優麗を喜べり。され
ば文學も帝都貴族の間に行はるゝのみにして、下流の人は文字
を知らるものも少かりき。

文事偏重の弊 尙武は邦人の通性にして、建國以來朝政に參與
せしものは武門より出でたり。されど、平安朝の大勢力たりし
藤原氏は素より文事を尙び、泰平に馴れては武事を卑しみたり。

文事を尙べば文學の流行するも當然にして、詩歌は管絃と共に上流の人が必須の技と稱せられき。武事を卑しみ風俗優柔に流るれば、文學もまたこの傾向を帯び、女子の宮廷に勢力ありしより、分けて纖弱の趣味を育成せり。加ふるに、文弱の公卿は京洛數里の間に籠居して遠く出遊せず、悠々たる生活極めて單調なれば、思想の變化極めて乏しかりき。従つて文學も一局面にのみ發展し、一旦その頂點に達しては停滯沈衰するのみなりき。佛教の感化 漢文學も前代より引續きて重んぜられしかども、儒教は却つて佛教に壓せられて、人心を感化すること到底彼に及ばざりき。佛教はこの時代のはじめ天台眞言の二宗更に傳來して朝野に擴まり、法事供養盛に行はれ、貴族の出家するも少からざりき。文學にも人世のはかなく宿命の免れがたきをい

ふこと多くなりしかども、未だ快闊なる邦人の性質の根柢を動かすには至らざりき。

美を愛し情を重んずる風 太古以來邦人は老幼憐み部伍睦みて、人に殘虐の行なく、おの／＼その業に安んじて相侵さず、無爲にして化する有様なりき。因襲風をなし、儒佛二教傳來しても、これによりて人心を箝束する要を見ざりき。平安朝に至りてもなほ往古のまゝにして、外來人爲の道義は制裁の力甚だ薄かりき。さりとして當時の人も徒に慾念の奔放に任ずるにはあらず、力めて中正なる性情を養はんとせり。かくして取るところの人生の尺度は善よりも美なり、教育は意の鍛冶にあらずして情の薰陶なりき。然れども情は狂ひ易し。物質的文化の開けて、これを制御する道義の存するなければ、その弊や浮華蕩逸と

なり、文學も實を失ひて華に過ぎ、輕靡、綺麗に流れたり。

一 弘仁時代

——一四五〇頃より一五五〇頃まで——

詩文の隆盛 太古より維新以前までは、學問といへば第一に支那の文學、儒學を舉げしといへども、この時代の如く漢文學のみ行はれしことは稀なりき。既に大化改新の頃より漢學は興隆の運に向ひ、爾來年を追うて盛なりしが、嵯峨天皇は殊に漢文學を奨勵したまへり。その頃、京都の大學、地方の國學の外に、名門貴紳が私學を設けて一族の子弟を教育するもの多かりき。教へしところ、經書、律令、算術などもありたれど、唐代の學風を受けて専ら詩文を重んじ、學者の中、文章博士の位置最も高かりき。

○私學には、空海の綜藝種智院、和氣廣世の弘文院、藤原冬嗣の勸學院、嵯峨天皇の皇后の學館

院、在原行平の聲學院、恆貞親王の淳和院などありき。

○空海の詩文集をまとめたものに性靈集あり。その詩文を論じたる書を文鏡秘府論といふ。

○道眞の詩文集に菅家文章・菅家後集あり。またその著に類聚國史あり。菅原氏は清公に興れり。その子に是善あり。道眞は是善の子なり。大江氏は吾人に興れり。菅原・大江二氏相並んで詩文界の霸たりき。

空海と篁 勅によりて編成せられし詩集には、凌雲集、文華秀麗集、經國集あり。何れも弘仁前後の詩を集む。平城、嵯峨、淳和、三帝みな詩を詠じ、殊に嵯峨天皇は才藻に富みたまひき。天皇と共に漢文學の興隆に力ありし人に僧空海あり。空海は教界一派の祖たると共にまた文學の恩人なりき。その唐に留學するや、佛教研修のかたはら詩文を學び、歸朝の際にはかの國の有名なる詩文集を携へ歸れり。我が國の漢文學は蓋しこれより蔚然として興れり。當時、小野篁また詩才に富みたりき。

菅原道眞 清和天皇以來また詩文に名ある人少からざりしが、就中、菅原道眞が平易暢達なる辭を以て悲惨なる實境を詠ぜし詩は、今に國民の同情をひくこと篤し。されど、この頃より大江・菅原の二家は文學界に於ける門閥の位置を占め、階級の固定は

○文選は梁武帝の子昭明太子蕭統の撰にして、古今の詩文を類聚す。支那の諺にも文選爛秀才半といへり。白氏文集は唐の白居易(字は樂天)の詩文集なり。その作平易にして趣味深きを以て名高し。

漸くその道を不振ならしめたり。支那文學の影響 當時の詩人が愛誦せしものは、六朝より唐代にかけての詩文にして、文選及び白氏文集殊に重んぜられたり。この二書が社會と文學との上に影響せしことは極めて大なりき。浮華・驕奢、四時の遊觀の盛なりしが如き一はこれがためなるべく、我が國の詩家歌人が取りたる題目も彼に得しもの甚だ多かりき。綴るところの文辭は四六駢儷體を旨とし、語句の配置に苦心して、眞情の流露を忘れ、纖麗の態を喜び、漢文學はこれより衰微の運に向へり。歌風の變遷 和歌は弘仁の頃には漢文學の流行に壓せられて一時屏息せし姿なりしが、清和天皇以來や、頭を擡げて漢詩と並び行はれき。これもまた時俗と漢詩との感化を受けて浮華

○業平は平城天皇の皇孫なり。その兄行平もまた和歌に名ありき。世に業平・遍照・小町・文屋康秀・大伴黒主・喜撰法師を六歌仙と稱す。

の體をなせり。奈良朝には歌人即ち武人なるもの少からず、従つて和歌も剛壯の氣に富みたりしに、今は文弱なる貴族の席上唱和の具となりたれば、その風の變化せしや知るべし。かくて五七の調は七五に轉じ、長歌は殆ど衰滅せんとし、爾來この風永く渝らず。在原業平は當時第一の歌人なるが、眞率なる詩想の迸出するに任せて、辭句の修練の如きは深く注意せざりき。僧正遍照・小野小町またこれと聲名を齊しくしたりき。月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、わが身ひとつはもとの身に。業平。はちす葉のにぐりにしまぬ心もて、なにかは露を玉とあざむく。遍照。

○神樂・催馬樂の歌曲を選定せしはその初貞觀年間にあり。

○片假名は漢字の眞書の省畫より成り、平假名はその草書より成る。何れも一人の作にはあらずるべし。
竹取物語は竹の中より生れしといふかぐや姫を主人公とす。姫

色見えでうつろふものは世のなかの人の心の花にぞありける。
小町

神樂・催馬樂 當時また神前に樂器に合せて奏するうたひものに神樂・催馬樂あり、平安朝の半ばを過ぐる頃まで盛に行はれき。神樂の一部は普通の短歌にして、その一部と催馬樂とは民間の俚謠より取りしもの多し。此等の俚謠は概ね奈良朝の末よりこの時代の初にかけてのものなるべし。

假名の弘通と物語類 漢文は久しく行はれしかども、なほ言ふところを自在に筆にするは容易なるわざにあらずりき。よりにて奈良朝には字を假りて音を寫す萬葉假名なども用ひられしが、これも複雑なれば、次いで片假名・平假名の製作ありき。この

はもと月界の仙、罪を得て暫く人界に生れ、後月宮に歸り上るといふ物語なり。伊勢物語は歌を主としたる片々の小話を集めたるものにして、その歌多くは業平の詠なり。

○遣唐使の廢止は寛平七年のことなり。その折菅原道眞大使たりしが、唐末亂離の狀を奏して遣使の益なきを述べしによれり。

假名は奈良朝よりこの時代にかけて次第に出來しものなるべく、その使用の弘まるに従つて散文は發達せり。散文の發達は小説・日記類に見るべく、その魁として竹取物語の如き傳奇小説を見るに至れり。これと前後して伊勢物語あり。二書の簡潔にして古樸なるは、後人の擬せんとして及び難きところなり。

二 延喜天曆時代

——一五五〇頃より一六五〇頃まで——

古今集 平安奠都以來年久しく、紀綱漸く弛みて地方離叛せんとせしかども、帝都の文化はいよゝゝ光彩ありき。世に醍醐天皇の朝を延喜の聖代と稱す。弘仁時代は専ら外國の文藝を謳歌したりしが、この時代に至りて、一方には遣唐使を廢すると共

古今集は和歌勅撰の始にして、爾來これを以て歌學第一の書とす。江戸時代に至りては萬葉集を賞ぶものあり、また新古今集を取るものありしかども、なほこの書は大いに重んぜられ

に支那文物の研究衰へ、一方には我が文化の發展に伴ひて國民の自信長じ、かくして純一なる國民的文藝歡迎せられたり。繪畫には巨勢金岡ありて美術を國風に化し、文學には和歌盛に行はれて漢詩を壓せり。歌界には紀貫之・凡河内躬恆等新に出で、こゝに弘仁の詩文隆盛は延喜の和歌勃興と變れり。延喜五年(二五六五)貫之・躬恆等勅を奉じて古今和歌集を撰し、萬葉集以後當時に至るまでの歌を集めたり。歌體こゝに至りて定まり、主觀的抒情を主とし、優麗の調を尙び、永く後世に範を垂れたり。貫之と躬恆 古今集の編成は貫之の功重きに居れり。貫之の歌を作るや、刻苦經營、想と辭と相合せしめんとして、一語一句苟くもせず、眞に雅正の氣ありき。後世彼を歌道の宗として人麿と併せ稱す。躬恆これと並び立ち、才氣の横溢を以て優れり。

人はいさ、心も知らず、ふるさは花ぞ昔の香ににほひける。

貫之

逢坂の關の清水にかげ見えて、いまや曳くらむ望月の駒。

同

春の夜の闇はあやなし、梅の花、色こそ見えね香やは隠るゝ。

躬恆

住の江の松を秋風ふくからに、聲うちそふる沖つしらなみ。

同

貫之の散文 貫之は和歌のみならず散文にも力を盡し、これより假名文大いに世に行はれき。その古今和歌集序の如き、漢文

○土佐日記は貫之が土佐の國守の任果てて京に上りし海路の日記にして、自ら一婦人に擬して書きたり。

の脈絡を應用して國文の一體を開けり。されど、駢儷體より出でてや、華麗に過ぐる難なきにあらざりき。貫之また晩年に土佐日記を作る。文體簡淨、國文の軌範と稱せらる。

土佐日記の一節 (正月二十一日の條)

二十一日。卯のときばかりに船いだす。みな人々の船いづ。これをみれば、春の海に木の葉もちれるやうにぞありける。おぼろげの願によりてにやあらむ、風もふかず、よき日いできて漕ぎゆく。この間に使はれむとて附きてくる童あり。それがうたふ歌。
なほこそ國の方は見やらるれ、父母ありとし思へばかへらや。

とうたふぞ哀なる。かくうたふを聞きつゝ漕ぎくるに、黒鳥といふ鳥、巖の上に集り居り、その巖のもとに浪白くうちよす。楫取のいふやう、黒鳥のもとに白き浪をよすとぞいふ。この詞何とにはなけれど、物いふやうにぞきこえたる、人のほどに合はねば咎むるなり。かくいひつゝ行くに、船君なる人、浪をみて、國よりはじめて、海賊むくいせむといふなることを思ふうへに、海のまた恐ろしければ、頭もみな白けぬ。七十、八十は海にあるものなりけり。

わが髪かみの雪ゆきと磯邊いそべの白浪しろなみと、いづれいづれまさされり、沖つ島守おき。
楫取かきいへ。

後撰集と拾遺集 村上天皇の朝は天曆の聖代とて、延喜時代と

○拾遺集は一條天皇の朝に至りて成れり。古今集に後撰集・拾遺集を併せて世に三代集といふ。源順の撰に和名抄あり。現存せる字書類の甚だ古きものの一なり。

○宇津保物語は藤原仲忠といふ貴公子と貴宮(あてみや)といふ姫君を主人公として貴族の生活を寫せり。落窪物語は落窪の君

竝べ稱せらる。天慶承平の亂こゝに終りて、都人は更に泰平に安んじ、學者文人また輩出せり。延喜時代の反動として漢文學や、復興せるが如くなれども、全詩の結構よりは寧ろ一二句の修辭に苦心して、器局小に過ぎ、畢竟漢詩の衰運に向ひしは疑ふべからず。和歌は盛に行はれて、これを詠ずるもの日々に多かりき。天曆五年(六二二)、源順等勅を受けて後撰和歌集を撰せり。これを古今集に比するに措辭や、蕪雜に流れたり。その後また拾遺和歌集の撰ありしが、後撰集と共に大體に於ては古今集の前轍を蹈むに過ぎざりき。

宇津保物語など、假名の使用は益擴張し、散文も漸次複雑となりて、こゝに宇津保物語の長篇を出すに至れり。人情の描寫を主とする小説はこれを始とすべく、九百餘年の昔にこの大作ありしは歎美に堪へたれども、その缺點は情を寫して眞ならず、辭をやることも粗なるにあり。當時の小説にまた落窪物語あり。

とて繼母に虐げられし女の立身出世せりといふ物語にて、滑稽の趣に富めり。

三 藤原氏全盛時代

一六五〇頃より一七五〇頃まで

假名文全盛 この時代の上半は即ち攝政道長が榮華に誇りし時にして、藤原氏の勢力絶頂に達し、一門宮廷に跋扈して花月の遊に耽れば、文藝にも優美なる平安朝の特性は最もよく發揮せられき。漢文學は男子の唯一の學問として行はれしかども、既に傾き來りし運命の回復すべくもあらず、今や文學の中心は全く移りて、當時の傑作は實に假名文を以て記されたり。されど、學問に誇れる公卿は卑しみてこれを用ひず、いはゆる女文字に

甘んぜし女子をして、却つて千歳不朽の名を博せしめたり。上流の風俗 當時の廷臣は京都に蟄居して地方のことを知らず、行政・軍事を卑しみて宴飲・管絃に日を送り、宮女と和歌を唱和するを事とせり。権力扶植の手段としては、名流貴族何れもその女を後宮に納れて皇室の外戚とならんことを望みき。かくて多くの女御・更衣・榮寵を競ひ、おのゝ才能ある女子を侍女として相誇れり。さればこそ當時の女流には文學に秀でたるものも輩出せしにて、その歌ふところ、書くところ、京都のこと、殊に宮廷のこと多く、その風のますゝ、優美柔弱に流れしもまたこれがためなりき。

清少納言と紫式部 當時の女流の最も文才ありしものを清少納言紫式部とす。二人はたゞに當時の第一流と稱すべきのみならず、古今を通じてまた第一流の文學者なり。清少納言は一

○定子と彰子とは同じく後宮にありて、顯榮を競ひ、その侍女に文學に秀でたる人多かりき。殊に彰子に於て然り。源氏物語五十四帖は光源氏といふ貴族を中心とし、多くの婦人を點出して、よく一々の品性を描寫せり。源氏薨じて後は、その子・薫大將を主人公とし、失意の境遇に置きて父の得意に對照せしめたり。紫式部には、源氏物語の外に紫式部日記の著あり。

ならず、古今を通じてまた第一流の文學者なり。清少納言は一
條天皇の皇后定子(道長の兄關白道隆の女)に仕へたり。その著
枕草紙は我が國の隨筆の始にして、見聞せるまゝ、思ひつきたる
まゝ、を筆に任せて敘述し、寸鐵人を殺す趣あり。筆鋒の銳利な
るはその才の男子を凌ぐを知るべく、觀察の緻密なるは女子の
特性を現せり。紫式部は一條天皇の中宮彰子(上東門院といふ、
道長の女)に仕へたり。源氏物語はその筆に成りて、貴族の生活
を寫せる長篇の小説なり。巧に長篇を組織して、抑揚あり、波瀾
あり、修辭精到にして流麗なり。されば、この書を以て我が國第
一の小説と稱するは當然の評なり。

枕草紙の一節 (うつくしき物)

うりにかきたる兒の顔。雀の子のねずなきするに躍りくる。またべにつけてするたれば、親雀の蟲などもてきてくゝむるも、いとらうたし。三つばかりなる兒の、急ぎてはひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。あまにそぎたる兒の、目に髪かみの覆ひたるを、かきはやらで、うち傾きて物など見る、いとうつくし。手緤たすがけにゆひたる腰こしの上の白しろをかしげなるも、見るにうつくし。大きにはあらぬ殿上童たみの、さうぞきたてられてありくも、うつくし。をかしげなる兒の、あからさまに抱きてうつくしむほどに、かいつきて寝入りたるも、らうたし。雛ひなの調度。蓮はらの浮葉のいと小さきを、池よりとりあげて見る。葵あひの小さきもいとうつくし。何

も何も小さき物はいとうつくし。いみじう肥えたる兒の二つばかりなるが、白しろううつくしきが、二藍の薄物など衣きぬ長くて、手緤あげたるが、はひいでくるも、いとうつくし。八つ九つ十ばかりなる男兒をとこの、聲幼げにて文よみたる、いとうつくし。鶏けいの雛ひなの脚高たかに、白しろをかしげに、衣みじかなるさまして、ひよひよとかしがましくなきて、人の後しりにたちてありくも、また親のもとにつれだちありく見るも、うつくし。鴨かりの卵たまご。舍利せりの壺かめ。撫子なでこの花。

源氏物語須磨の巻の一節 (光源氏が須磨のわびすまひ)

須磨には、いと心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の關ふきこゆるといひけむ浦波、夜々はげにいと近くきこえて、またなく哀なるものは、かゝるところの秋なりけ

り。御前にいと人ずくなにて、うち息みわたれるに、一人目を
さまして、枕を敬て、四方の嵐を聞きたまふに、浪たゞこゝも
とにたちくるこゝちして、涙おつとも覺えぬに、枕うくばかり
になりにけり。琴を少しかきならしたまへるが、われながら
いとすごうきこゆれば、ひきさしたまひて、

こひわびてなく音にまがふ浦浪は、思ふ方より風やふく
らむ。

とうたひたまへるに、人々おどろきてめでたうおぼゆるに、し
のばれで、あいなう起きゐつゝ、涙をしのびやかにかみわたす。
げにいかに思ふらむ、わが身一つにより、親はらから片時たち
はなれがたく、程につけつゝ、思ふらむ家を別れて、かく惑ひあ
へるとおぼすに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを心細し

と思ふらむとおぼせば、晝は何くれとたはぶれ言うちのたま
ひ紛らし、徒然なるまゝに、いろ／＼の紙をつぎつゝ、手習をし
たまひ、珍しき様なる唐の綾などに、様々の繪どもをかきすさ
びたまへる屏風のおもてどもなど、いとめでたく見どころあ
り。人々の語りきこえし海山の有様を、遙かにおぼしやりし
を、御目に近くてはげに及ばぬ磯のたゞずまひ、二なくかき集
めたまへり。この頃の上手にすめる干枝常則などをめして、
作繪つかうまつらせばやと、心もとながりあへり。なつかし
うめでたき御有様に世の物おもひ忘れて、近うなれつかうま
つるをうれしきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。前
栽の花いろ／＼、咲き亂れ、おもしろき夕暮に、海みやらるゝ廊
に出でたまひて、佇みたまふ御様の、ゆゝしう清らなること、所

がらはましてこの世のものとも見えたまはず。白き綾のな
よ、かなる、紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣帯しどけ
なくうち亂れたまへる御様にて、釋迦牟尼佛弟子となのりて、
ゆるゝかによみたまへる、また世にしらずきこゆ。沖より舟
どものうたひのゝしりて漕ぎゆくなどもきこゆ。ほのかに
たゞ小さき鳥のうかべると見やらるゝも心細げなるに、雁の
列ねてなく聲、楫の音にまがへるを、うちながめたまひて、御涙
のこぼるゝをかきはらひたまへる御手つき、黒木の御數珠に
はえたまへるは、……人々のこゝちみな慰みにけり。

○和泉式部にはそ
の家集の外に和
泉式部日記の著
あり。その子小

和泉式部等 和歌にて當時無雙の名家は和泉式部なり。和泉
式部は紫式部と同じく彰子に仕へ、天稟の詩才、物に觸れ事に感

式部内侍も和歌
に名ありき。赤
染衛門・伊勢大
輔等もまた當時
の歌人なり。

○源氏物語の後に
出でし小説にて
は、狭衣物語・濱
松中納言物語な
どを推すべし。
本朝文粹は藤原
明衡の編纂にか
かる。今昔物語
は源隆國の撰な
りと傳ふ。

じて、咳唾珠をなせり。藤原公任は和漢の學に長じ、歌道に於て
も第一の先達と稱せられしが、舊習を墨守してその實は名にか
なはざりき。これに反して、曾根好忠は時風の因循固陋に厭き、
ひとり用語の自由、格調の變革を唱へしかども、その作に險難の
語句多く、世人はこれを卑しとして顧みざりき。
道長薨後の頽勢。道長薨じて後、藤原氏の勢やゝ傾き、國運もま
た振はざりき。地方には平忠常の亂、前九年の役あり、武人處々
に地を占めて漸く實力を養ひ來れり。藤原氏と共に浮沈せし
文學は、こゝに至りてまた漸衰の運に向はざるを得ず。小説も
勢源氏物語に極まり、その後の製作はたゞこれを模擬するに過
ぎず。その他の編著にして見るべきものは、邦人の漢詩文を選
びし本朝文粹、和漢天竺の雜談を集めし今昔物語などあるのみ。

四 院政時代

——一七五〇頃より一八五〇頃まで——

院政時代 後三條天皇英邁の資を以て親しく政を視たまひしより、藤原氏の権力は次第に衰へ、延いて院政の世となりき。紀綱や、伸張し、人心また興奮せしといへども、白河鳥羽の二帝奢侈を好みたまひ、君臣共に容儀を修すること婦人の如く、後三條天皇の振肅も直ちに弛みて、風俗ますく、浮華に流れたり。源平鬭争の世、京都も禍亂の巷となりしが、月卿雲客はなほ姑息の安を貪りて舊習を更むるを喜ばざりき。かゝる時には長篇大作の出づること稀なれば、一時の唱和、半日の消閑に便ある短歌がひとり流行を極めしも偶然にあらず。

和歌の新體 古今集の風調は歌道の正風として久しく行はれ

○俊頼の家集を散木奇歌集といひ、好忠の曾丹集と併せて、用語の放縱と難解とを以て名あり。

○千載集の成りしは文治三年（一一六三）なり。

しが、世人は漸くその陳套に飽きたり。この時に當り改新の旗を翻ししものを源經信とす。その子俊頼出藍の才を以て大いに新體を唱へ、藤原基俊保守の見を懷いて俊頼と衡を争ひしかども、天下は靡然として新體に傾きたり。新體は曾根好忠の詠に得るところ多く、用語を自由にし、日常の俗語をも採り、また助辭を略し、名詞にて結びなどして、句格を緊密ならしめたり。殊に多とすべきは、和歌の題目を擴め、屢、客觀的に自然の景物を詠ずるに至りしことなり。されど、その弊や奇を好み俗に流れ、蕪雜にして統一なく、擾亂せること恰も源平の争の如くなりき。

千載集 時に藤原俊成千載和歌集を撰して新體の長短を取捨したり。溫雅にして清新なる一體こゝに至りて漸く定まれり。されど、この改新も根本的の轉化にあらず。社會の思想に變動

○西行の家集を山家集といひ、大いに世に行はる。

なければ、和歌の内容も舊の如くにして、寧ろその形式に於て精巧緻なるに至りしなり。さるが中に群を抜きて異色ありしを僧西行とす。

西行 西行はもと武門の人なり。世をはかなみて出家し、四方を周遊して風月を友としたり。常に山水の景に接して天成の才を養ひ、詞句に拘泥せずして自在に感想を吐露せり。時に佛教の腐敗既に久しくしてこゝに革新の氣運に向ひ、新なる宗教まさに起れり。西行この時に出でて、詠ずるところ佛教の趣味多く、和歌の内容に深遠の度を加へたり。

夕されば、門田の稻葉おとづれて、蘆のまろやに秋風ぞふく。

經 信

うづらなくまのの入江の濱風に、尾花波よる秋のゆふぐれ。

俊 頼

夕されば、野邊のあきかぜ身にしみて、鶉なくなり、深草の里。

俊 成

道のべに清水流る、柳陰しばしとてこそたちとまりつれ。

西 行

○歌論の起源については異説ありといへども、貫之の古今集序などその魁なるべきか。

歌論の勃興 和歌の流行と共に歌論の學も勃興するに至れり。歌論はもと支那の詩論より出でたり。前期に藤原公任出でてや、體を備へしが、この期に至りて始めて盛になれり。藤原基俊博覽に誇りて一家の見を立て、藤原俊成これに學びて別に家學を開き天下の師表となれり。藤原清輔また歌論に名ありき。

○朗詠を集めしものには、藤原公任の撰せし和漢朗詠集、藤原基俊の新撰朗詠集あり。

されど、淺薄なる形式の論、無益なる舊例の争のみ多かりき。朗詠と今様 うたひものとしては、平安朝の中世このかた、朗詠今様盛に行はれき。朗詠は曲節を設けて詩句短歌を朗吟するものなり。今様は七五の句を重ねたるものにて、その句数の四なるもの殊に多し。平安朝のはじめ既に佛教を讚したるものなど見え、いろは歌の如きもその一なるが、この時代の婉柔なる姿を好む風に投じて、大いに世に行はれ、次いで次期にも及べり。

舊都の詠（今様）

藤原實定

古き都をきて見れば、淺茅が原とぞ荒れにける。
月の光はくまなくて、あき風のみぞ身にはしむ。

○榮華物語は赤染衛門の手に成れりとの説あれども信じ難し。大鏡は藤原爲業の作なりと稱すれどもまた定かならず。その後出でたるものに水鏡・今鏡・増鏡などあり。

國文體の歴史 散文の見るべきものには、僅に榮華物語大鏡などあり。榮華物語は長くして冗漫に、大鏡は史記に倣ひて作りしものにして、筆路頗る勁拔なり。二書ともに關白道長を中心として藤原氏の榮華を寫し、我が國の國文體の歴史の始なり。

第三章 鎌倉室町幕府の世

文學の不振 源頼朝幕府を鎌倉に開きて、政體こゝに一變せり。武人權力を握りて兵事に勵み、戰亂屢起りて庶民は疲勞し、從つて文學も衰微せり。出づるところ多くは見聞の事蹟もしくは古事來歴を記述せる軍記雜纂隨筆有職の書などにして、想像力によれるものは少かりき。

文學の佛教的傾向 公卿は政權を失ふと共に意氣も沮喪し、因循姑息にして古人の糟粕を嘗むるに過ぎず、武人は文事を輕んじて文學に志すもの多からざりき。この時に當りて、武家の祐筆となり參謀となりて専ら文筆に従事せしものは僧侶にして、純文學も多くはその手に成れり。されば、この時代の文學に佛

教的傾向の存すること平安朝よりも甚しきは、一は僧侶の手に成りしがためにして、一は時勢の然らしめしなり。當時頻繁なる變亂は社會をしておのづから厭世に傾かしめたる折しも、禪淨土一向日蓮などの新宗派、或は支那より傳はり、或は我が國に起りて大に行はれ、深く人心の根柢に染みしことまた舊時の比にあらざりしを思ふべし。儒教の影響の文學に現れしこともあれど、佛教に壓せられてその勢力は微々たりき。

一 鎌倉時代

一八五〇頃より一九八〇頃まで

鎌倉初期 鎌倉時代の中、文壇の最も賑はひしをそのはじめ三十四年とす。時に後鳥羽天皇帝室の式微を憂へ、銳意事に當り

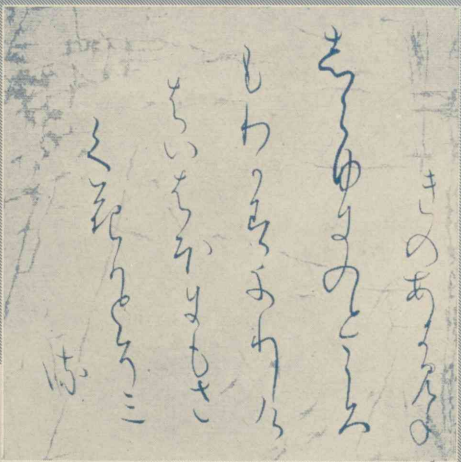
たまひしかば、都人も前途に希望を有して新に活氣を生じ、文藝もこれがために一時の盛況を呈したり。

○八度の勅撰集は古今・後撰・拾遺・後拾遺・金葉・詞花・千載・新古今の八集なり。

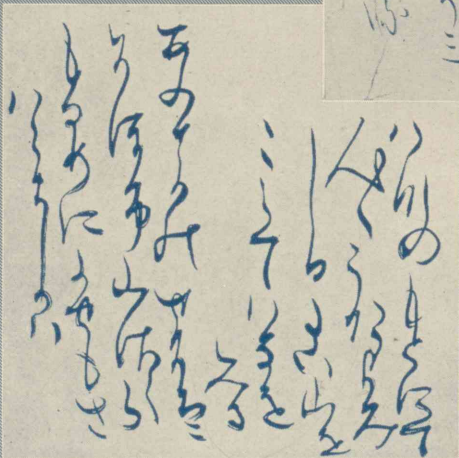
○當時の歌人の中定家殊に後人の尊崇を得、貫之と並べて和歌の聖と仰がる。その子爲家の妻(阿佛尼)また和歌をよくせり。

新古今集 文學は前期に引續きて和歌最も盛なりき。元久二年(二八六三)後鳥羽上皇の勅によりて、藤原定家・同家隆等新古今和歌集を撰せり。延喜よりこの時に至るまで和歌の勅撰八度に及びしが、その中古今集と新古今集と殊に勝れたり。新古今集は千載集の歌風を大成せしものにして、かの清新の體を節するに更に古今集の古調を以てしたり。

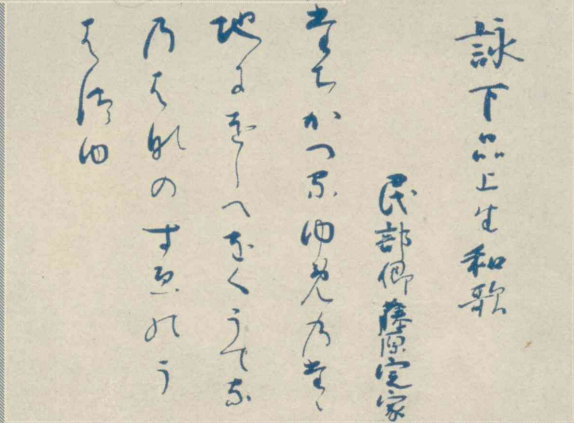
當時の歌人 上の好むところ下これに靡き、有名なる歌人輩出せり。後鳥羽・土御門・順徳の三帝共にその道を得たまひ、藤原良經は天授の才を以て時流を詠じ、その叔父僧慈圓は西行に學びて好んで佛教の趣味を含め、實朝は萬葉集の古調を喜べり。俊



紀貫之筆蹟



西行法師筆蹟



藤原定家筆蹟

その東下の紀行
十六夜日記世に
行はる。

成の子定家は家隆と共に名匠の譽一世に高かりき。定家は古語の平穩なるを喜びしかども、措辭は巧緻を極めて時に了解に苦しむものありき。家隆は暢達の調を用ひき。

われこそは新島守よ、隱岐の海のあらし浪風、心して吹け。

後鳥羽上皇

足柄の關路こえゆくしのゝめに、一むらかすむ浮島が原。

良經

武士の矢竝つくるふ小手の上に、霰たばしる奈須の篠原。

實朝

山のはの月まつ空のにはふより、花にそむくる春の燈火。

定家

かすみたつ末の松山、ほのくくと波にはなる、横雲のそら。

山のおのの見まへの空のうらふまとの雲のさかきの家隆

軍記の勃興 平安朝の半ば頃より漢學漸く衰へ、上流の人はなほこれを第一の學問とせしかども、多くは純粹なる漢文をかきえず、こゝに和漢混淆の一體を生ぜり。衰ふるはまた興る基にして、この文體は國文の優美に漢文の遒勁を交へ、幽玄なる佛語をさへ加へて、遂に後世通用の文となれり。この混淆體の大いに光彩を放ちしは源平争闘の始末を記せる軍記類なり。そもそも源平二氏の盛衰の迅速なる、これを見聞するものの感懐はうたゝ假作小説よりも深し。こゝに於て軍記の作ありき。その最初に出でしは保元物語、平治物語にして、文章や、質實なり。

○保元・平治の兩物語は葉室大納言時長の作と傳ふれども詳ならず。平家物語と源平盛衰記との前後については

古來異論あり。平家物語は僧慈圓に扶持せられし信濃前司行長の作と傳ふ。されどこれも定かならず。すべて此等の軍記は虚實相交るものなることを忘るべからず。

次いで平家物語、源平盛衰記出でたり。この二書は大體その組織を同じくすれども、平家物語は諷誦せんがために悽惋の調を加へ、源平盛衰記は記事の委曲を盡さんことを期せり。此等の軍記は史實に據りて而も史實に拘泥せず。思ふに源平時代より建長年間までの作なるべし。

平家物語の一節 (大原御幸)

遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉にみゆる梢には、春の名残ぞ惜しまるゝ。頃は卯月二十日あまりのことなれば、夏草の繁みが末を分けいらせたまふには、はじめたる御幸なれば、御覽じ馴れたる方もなく、人跡たえたるほども思召しやられて哀なり。西の山の麓に一字の御堂あり。即

ち寂光院これなり。古う造りなせる泉水木立、よしある様の所なり。いらかやぶれては霧不斷の香をたき、とぼそおちては月常住の燈をかゝぐとも、かやうの所をや申すべき。庭の若草しげりあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりもめづらしく、岸の山吹咲きみだれ、八重立つ雲のたえまより、山郭公の一聲も、君の御幸を待ちがほなり。法皇これを叡覽あつて、かうぞあそばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて、波の花こそさかりなりけれ。

ふりにける岩のたえまより落ちくる水の音さへ、ゆるよしあ

る所なり。緑蘿の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及びがたし、女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦あさがほはひかゝり、しのおまじりの忘草、瓢箪しばし、空し、草、顔淵が巷に滋し、藜藿深くとぎせり、雨、原憲が樞をうるほすともいひつべし。すぎのふきめもまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に争ひて、たまるべしともみえざりけり。後は山前は野邊、いさゝ小笹に風さわぎ、世にたゝぬ身のならひとて、うきふししげき竹柱、都の方の言づては、間遠にゆへるませ垣や、わづかにこととふものとは、峯に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら青つゞら、くる人稀なる所なり。法皇、人やあるくゝとめされけれども、御いらへ申すものもなし。やゝありて老い衰へたる尼一人まゐりたり。女

院はいづくへ御幸なりけるぞと仰せければ、この上の山へ花
 つみに入らせたまひて候ふと申す……や、あつて上の山
 より、濃き墨染の衣きたりける尼二人、岩のかけぢをつたひつ
 つ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇あれはいかなる者ぞと
 仰せければ、老尼涙をおさへて、花がたみ臂にかけ、岩つゝ、じ取
 り具して持たせたまひて候ふは、女院にてわたらせたまひ候
 ふ。つま木にわらび折り具して侍ふは、鳥飼中納言維實の女
 五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母大納言典侍の局と申し
 もあへず泣きにけり。法皇御涙せきあへさせたまはず。女
 院は世を厭ふ御習といひながら、今かゝる有様を見えまゐら
 せんずらん恥かしさよ、消えも失せばやと思召せども、かひぞ
 なき。宵々毎の閻伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉おきの袖

の上、山路の露もしげくして、しぼりやかねさせたまひけん、山
 へも歸らせたまはず、また御庵室へも入らせおはしまさず、呆
 れて立たせましゝ、たるところに、内侍の尼まゐりつゝ、花が
 たみをばたまはりけり。

鎌倉中期以後 承久の役に官軍敗れて、鎌倉幕府の基礎いよいよ堅く、これより京都は自由の念なく、希望の光を失ひて、萎靡して振はざりき。關東の武士はもとより文筆に疎ければ、鎌倉時代中期以後の文學は見るべきもの少かりき。散文のやゝ見るべきは、十訓抄古今著聞集などの雜纂類あるのみ。此等は何れも平安朝の今昔物語などに倣ひて、古來のおもしろく珍しき事實を輯めしものにして、率直平易なる文體にてかけり。

○雜纂類にては鎌倉時代の初に古事談・宇治拾遺物語などあり。前者は記事極めて乾燥、後者の記事の過半は今昔物語・古事談などより採れり。

○定家の子に爲家あり。爲家の子爲氏(二條)・爲教(京極)・爲相(冷泉)より三家に別れたり。

歌道の門閥 和歌の衰へしも散文に同じ。人心は漸次萎縮せしに、藤原俊成定家二代相續いて名手の譽ありしより、歌道の勢力はすべてその一門に歸せり。その子孫は二條京極冷泉の三家に別れて互に反目せしが中に、二條家は嫡流として殊に榮え、歌集の勅撰も多くはその一門より出でしが、その家を尊くせんがために、種々の法式を設けて子弟を束縛せしかば、斯道は却りて日々に萎縮するに至れり。

二 吉野朝

——一九八〇頃より二〇五〇頃まで——

吉野朝の概観 建武中興の業成り、幾ばくもなくまた壞れて、公家・武家闘争の世となりしが、政治の中心は關東より畿内に復せ

り。輦下の貴紳は懶眠より覺めて更に政治にあづかり、文學も一時は希望を有し活氣を生ぜしこと、鎌倉時代のはじめの如くなりき。戦うて利なきは憤慨の情を文筆に漏らし、亂離の變にあひては人生の險に恐れ隱遁の安を説けり。これこの時代に於て多く見るところなりき。

頓阿 和歌は黨同伐異の弊を受けて微々として勢なかりしが、僧頓阿二條家の門に出でて二條の中興と稱せられ、一時みなこれに靡けり。歌風は穩和を主として屢、平凡に流れたり。

兼好 僧兼好頓阿と親しく和歌にも名ありしが、その不朽の譽は徒然草の著あるによれり。徒然草は脈絡なき隨筆にして、著者が閑靜の境を愛し花月の美を愛して、悠々自適、趣味を談じ人情を説き、よく老佛の説を融化せしを見る。文章暢達にして雅

○頓阿は二條爲氏の子爲世に學べり。その家集を草庵集といふ。關白二條良基は頓阿に學びてまた和歌に名ありき。

○兼好は卜部氏、もと京都吉田社の祠官に出づ。後宇多上皇に仕へ、上皇崩御の後出家せり。

○當時また吉野拾遺の著あり。松翁の編するところ、吉野朝君臣の逸事を集む。

○太平記は小島法師の撰なり。法師の傳詳ならず。應安七年歿せり。

馴世に枕草紙と併せて隨筆の雙絶とす。北畠親房 歴史には北畠親房の神皇正統記などあり。親房は吉野朝に仕へ、楠木新田の諸將の戦死後は、ひとり王事に勵みて國家の柱石たりしが、軍旅の間にも筆硯を捨てざりき。正統記は著者が國事を慷慨して古來の歴史を述べ皇統の正閏を論ぜしものにして、文章平直に議論正大なり。

太平記など 源平の争鬪ありて源平盛衰記などの著作ありき。公家武家の戦亂ありてこゝに太平記の長篇を見たり。太平記は文體源平盛衰記より出でて、一層雄大にして絢爛なるがや、華に過ぐる嫌あり。體裁も整頓せず。その後、軍記の類にして見るに足るべきは曾我物語義經記などにして、次期に互りての作なるべし。

三 室町時代

二〇五〇頃より二一五〇頃まで

○義滿の時、同朋觀阿彌及びその子世阿彌ありて新曲を作れり。これを作るといへども、彼等は其の譜節を定めたるまでなればし。その後續いて新曲の作あり。今日までも普通に行はるゝは凡そ二百番なり。謠曲には幽靈顯れて往事を語り、高僧の回向によりて成佛すといふ趣向のもの少からず。

能樂と謠曲 室町幕府の世は戦亂相繼げり。されど、義滿の頃はなほ幕府に威權ありき。義滿遊樂を好み能樂を興せり。能樂は委しくは猿樂さるまわしの能といふ。昔より神事に用ひたる伎樂なりしが、義滿に至りて樂師をしてその他の舞樂をも折衷して能樂を起さしめ、これに合せんがためにまた新曲を作らしめたり。これ即ち謠曲なり。これより先禪宗行はれしより、僧侶の支那に渡航して宋元の文化を傳へしこと少からず。義滿新に明と修交して海外の交通や、繁かりき。謠曲の文は蓋し當時の僧侶の手に成りしもの多かるべく、結構は元の戯曲に出で、また佛教の思想を含む。詞句は古文辭を補綴すれども、よく諧和して

好調に富む。これより能樂流行して武家の式樂の如くなり、新曲續いて出でしかど千篇一律の嫌を免れざりき。狂言 能樂の餘興として、その間に挟みて行ふものに狂言あり、その技、能樂の嚴正なるに對し、滑稽を旨としてよく人の頤を解き、往々世情を諷刺せるところあり。その文は當時の言語をそのまゝに寫して率直愛すべし。

謡曲八島の一節

また修羅道の関の聲、矢さけびの音震動せり。今日の修羅の敵は誰ぞ。なに能登守教經とや。あらものしや、手並は知りぬ。思ひぞ出づる壇の浦の、その船軍今はや、閻浮に歸る生死の、海山一同に震動して、船よりは関の聲、陸には波の楯、

月にしらむは劔の光、潮に映るは甲の星の影、水や空、空ゆくもまた雲の波の、うち合ひさしちがふる船軍のかけひき、浮き沈むとせし程に、春の夜の波より明けて、かたきと見えしは群れる鷗、関の聲と聞えしは浦風なりけり、高松の浦風なりけり、高松の朝嵐とぞなりにける。

應仁の亂 應仁の亂起りてより京師も修羅の巷となりき。一條兼良名門に生れて官位顯達し、博覽強記にしてまた文學の才あり、亂を避けて地方に遊べり。その第内の文庫は藏書の富を以て名ありしが、兵士に毀たれ、幾百合の典籍衢に落ち散り、誰收むるものもなかりきといふ。

和歌の非運 和歌も日に衰へたり。京極・二條兩家共に既

○兼良は關白となり三宮に准ぜられ、著述甚だ多かりき。その子關白冬良また父について名ありき。

○勅撰集は後花園天皇の朝の新續古今集にて絶えたり。古今集よりこの集までを合せて二十一代集といふ。室町時代の武士にて今川了俊・太田道灌また和歌をよくしたリ。

○良基は連歌新式を撰定せし外に筑波問答を著してその道を論

に絶え、古今集以來連續したりし歌集の勅撰もまた遂に絶えたり。應仁の頃、東下野守常縁といふ武士、歌學の祕事傳授の中殊に古今傳授を重しとし、これを定めて僧宗祇に傳へたり。その傳授も淺薄にして附會なる説多く、かくの如きことを唱へてその道を貴くせんとせし社會の窮狀は寧ろ憐むべし。連歌の流行 和歌に代りて大に行はれしは連歌なり。連歌とは、短歌一首の半ばを一人が詠めば、他の一人がこれに繼いでその半ばを詠むものにして、もと一種の遊技に過ぎず。その起源は太古にありき。後鳥羽天皇の頃より、分けて和歌の餘興としてこれをもてはやし、一首のよみきりに止まらず、首尾相繼いで二十句以上十句にも及びたりき。吉野朝に二條良基、これを好みてその式を定め、また勅撰に准じて菟玖波集を撰せり。蓋

じ、宗祇は吾妻問答を著せり。

し連歌の技たる深く精力を費すものにあらず、干戈匆忙の際にも半日の閑を樂しむに適すれば、ますます世に行はれ、應仁の頃僧宗祇に至りて絶頂に達せり。宗祇旅行を好みて詩才を養ひ、四方に流浪して居を定めず。嘗て勅を奉じて新撰筑波集を撰せり。海内風靡して斯道の宗と仰ぎたり。門人に僧宗長・牡丹花宵柏最も名ありき。

當時の連歌の例 (永無瀬三吟百韻の中)

| | |
|------------------|----|
| 雪ながら山もとかすむゆふべかな、 | 宗祇 |
| ゆく水とほく梅にほふ里、 | 宵柏 |
| 河風にひとむら柳春みえて、 | 宗長 |
| 舟さす音もしるきあけがた | 宗祇 |

月やなほきりわたる夜に残るらん、
霜おく野はら秋はくれけり。

宵 柏
宗 長

四 戦国時代

——二一五〇頃より二二六〇頃まで——

当時の概観 應仁以來天下大いに亂れ、皇室は窮乏の極に達して節會・大禮も行はれず、幕府は全く威權なきに至れり。京都は荒れて貴賤四方に離散し、諸侯はその領地に割據して干戈を事とせり。かゝる時文學が衰微の極に達することは多言するを要せず。地方には、堺に細川氏・三好氏、山口に大内氏、小田原に北條氏ありて分けて勢強く、文藝に長けしもの一時遁れ來りて此等の地に住みたりき。

○戦国時代唯一の學校といふべきものに足利學校あり。これよりさき鎌倉時代に北條顯時・金澤文庫を建てたりしが、この時代には衰亡したり。足利學校は吉野朝の頃足利基氏の興せしものなり。

○京都の五山は天龍・相國・建仁・東福・萬壽の五寺にして、南禪寺を五山の上といひ、妙心寺またこれに劣らぬ大寺なり。

○御伽草紙の中には文正・鉢かづき最も世に知らる。舞の本もまたこの頃大に行はれたり。

文學の衰微 鎌倉時代以來、禪僧の支那に往來してかの國に學び、詩文をよくせしもの少からざりき。戦國の世、文物の衰滅に近き時に於て、漢文學の命脈を保ちしは禪僧にして、殊に京都の五山はその淵藪なりき。和歌・國文の衰へしこともまた甚しかりき。連歌はさすがに無學のものも作ることを得れば盛に行はれて、武人が戰場消閑の技として用ひられたり。

平民文學 文運かくの如く慘憺たりしかども、都鄙の懸隔減じ貴賤の階級壞れたれば、京師の貴族等が文學を獨占せし風も共に失はれたり。武人に和歌をよくせしものあり、和歌よりも連歌の行はれしなど、何れもこの傾向を示せり。されば、江戸幕府の世に盛なりし平民文學の曙光も既にこの時に現れたり。御伽草紙とて童蒙の訓誨に資すべき小説の類は、この頃の作多か

るべく、淨瑠璃即ち戯曲の起源もこゝにあり。山崎宗鑑・荒木田守武が好んで連歌の俳諧體を詠じ、卑俗滑稽を旨とせしは俳諧の始にして、連歌の一句十七字を全詩として詠ずることもまたこの時代に起れり。

第四章 江戸幕府の世

文學の普及 江戸幕府の世は泰平打續きて、文化の進歩前古に比なかりき。ひとりこれに對比すべき平安朝の文化も、貴族の占むるのみにして庶民は與らざりしが、この時代はこれに異なり、學問・藝術上下に涉りて四民共にその徳を享け、文學の滋味も弘く世に味はるゝに至れり。文學の階級 されど、幕府の施設漸く成るに従ひて、戦國の世に壞れかゝりし階級の制も更に立ち、従つて文學にも貴賤の別なきを得ざりき。上流の人は詩歌を詠じ、下流の人は俳諧を遊び、彼は學問を喜び、此は戯曲・小説を愛し、彼は古文を墨守して固陋に流れ、此は新作に傾倒して卑俗に陥り、學識あるものは新興の

文學を卑しむ新興の文學に就くものは自ら低うして高尚なる趣味を解せず、かくて戯曲・小説の如きは戯作を以て目せられて、正當なる文學上の地位を得ること能はざりき。

儒教の勢力 この時代に於ける著しき思想界の現象は、儒教が佛教に代りて勢力を得しことなり。佛教の上下を通じて普く行はれしことは變らずといへども、僧侶は漸く安逸に馴れて布教を怠りき。この時儒教は勃然として興り、力めて修身・齊家の道を唱へしかば、世人を導いて文化の域に進ましむるもの今は佛よりも儒なり。國學の新に興りて我が國固有の道を明めんとせしこともまた注意すべし。

武士道の勢力 殊にこの時代の人心を支配せしものは武士道なり。武士道は、日本固有の廉潔尚武の精神に、人倫五常の別を

○この時代の戯曲・小説類は多く題目を鎌倉室町時代に取れ

り。源義經の一生、曾我兄弟の復讐の如きは殊に邦人の武士的觀念に適合し、既に室町時代より盛に著作の材料となれり。

明にする儒教の意と、信仰を本として生死を離るゝ佛教の旨とを折衷し、これを古來の戦亂に鍛へて成りしものにして、この時代に至りて内容・形式共に備はり、武士はこれを以て造次にも忘るべからざる大道とせり。その朴直を守りて浮華を斥け、感情を卑しみて義理に進み、また婦人を輕んずるは著しく平安朝に相違せる要點にして、また武事を偏重せしより時に殺伐に流るる弊なきにもあらざりき。

一 寛永時代

——二二六〇頃より二三四〇頃まで——

偃武後の趨向 徳川家康國內を一統して四民始めて泰平の化に浴せり。家康性極めて慎重、馬上に天下を得しといへども、馬

上にこれを治むべからざるを知りて文學の興隆に志せり。命じて散亂せる書籍を集め、必要なるものは活字を製して版行せしめたり。世既に靜謐なるにまたこの奨励あり。寛永の頃に至りては衰廢せし文學も漸く復興の運に向へり。

朱子學の勃興 文學復興の魁たりしは漢學なり。されど、久しく打續きし戰亂の後を受けては、未だ詩文に心を潛むべき餘裕なく、有識の士は寧ろ儒教によりて社會の秩序を回復せんとしてたり。かくて儒教の興隆に功ありしを藤原惺窩及び林羅山とす。家康の京都にあるや屢、惺窩を延いて經史を講ぜしめしが、多くは辭して出でず、門下の俊才羅山を薦めたり。羅山は家康の聘に應じて江戸に來り、律令制度の改定に參與して大功ありき。これより子孫代々儒を以て幕府に仕へたり。この二人が

○惺窩は冷泉家に
出で、定家の裔
なり。はじめ佛
門に入りしが轉
じて儒者となれ
り。羅山は蘿髮
して道春といへ
り。

○藤樹は近江聖人
と稱せらる。そ
の藤樹書院今に
存す。關齋はは
じめ朱子學を野
中兼山等に學べ
り。兼山は土佐
侯に仕へて治績
ありき。

奉ぜしは宋の朱熹の學なりき。朱學は既に吉野朝の頃より我が國に傳はりしが、惺窩、羅山等出でてより大いに世に行はるゝに至れり。その他の學派、朱子學の外に陽明學も行はれたり。近江の人中江藤樹、明の王陽明の學説を奉じて實踐躬行を勵み、好んで孝經を講ぜり。近隣その徳に服して皆善に移れりといふ。熊澤蕃山これに學び、備前侯に仕へて治績ありき。儒教かくの如く行はれ、社會に於ける感化は今や佛教の及ぶべきにあらず。神道には、從來佛教思想を以て説をなししもの漸く衰へ、山崎闇齋が朱學の説によつて垂加神道を立てて世に用ひられしが如き、よく儒佛二教の勢力の消長を示せり。歌道の授受、和歌に於て戰國とこの時代との過渡の人は細川

○和歌に巧なる人に、幽齋と同時に、木下勝俊あり、幽齋の門人に中院通勝・烏丸光廣等ありき。

○貞徳が俳諧の式を立てしはその著御筆にあり。門人に野々口立圃・松江重頼・安原貞室等あり。宗因は重頼に道をきゝて更に一家を立てたり。

幽齋なり。幽齋は武人にして諸藝に通じ、殊に歌道を傳へて大いに世に重んぜられき。幽齋に學びしもの公卿にもその人少からざりしが、何れも古來の弊風を墨守せるに過ぎざりき。ひとり地下に松永貞徳がまた幽齋の傳授を受け、その道の中流以下の人に弘めし功を多とすべし。俳諧の勃興されど、貞徳の主なる功は和歌よりも俳諧にありき。貞徳は京の人。始めて俳諧の式を定め、これを連歌より獨立せしめたり。門人頗る多く、江戸幕府の世に俳諧の興りて連歌の廢れしは、實に貞徳の唱道によれり。されど、その作なほ幼稚なりき。この一派を古風と稱す。次いで西山宗因大阪に起り、舊格を打破して、放縱なる一體を創めき。これを檀林風といひて、また一時大いに世に行はれたり。

しをるゝは何かあんずの花の色。貞徳
冬籠り、蟲けらまでもあなかしこ。同
世の中や、蝶々とまれかくもあれ。宗因
やがて見よ、棒くらはせん蕎麥の花。同

訓蒙平易なる文學 この時代は文學復興の機運に向へりといふまでにて、未だ旺盛の時至れるにあらず。新作の書も多くは訓蒙諺解の類なりき。小説の類も假名草紙といひて、御伽草紙より僅に一步を進めしものの訓誨を旨とせるが多かりき。

二 元祿時代

○假名草紙の作者には鈴木正三・淺井了意等名あり。

—二三四〇頃より二四〇〇頃まで—

元祿時代の盛運 泰平久しく生活豊かにしてこゝに元祿時代の盛運は來れり。中古以來の文學はその思想用語共に舊習に縛せられて、狭小なる局面に逡巡するのみなりしが、今や先例の桎梏を脱し直ちに自然と人生とに接して、自在に事物を研究し感想を述ぶるに至れり。

儒者の輩出 將軍綱吉漢學を好み、屢、儒者を集めて經義を討論せしめ、またみづから經書を講じ、諸侯も競うて儒者を聘せしかば、漢學頗る熾になり、學者一時に輩出せり。林家には羅山の孫鳳岡幕府に信任せられき。木下順庵は京の人、後江戸に出でたり。その學博通、不偏を旨とし、門下に新井白石、室鳩巢等著名の士多かりき。伊藤仁齋京に起り、朱子學は孔孟の古意にあらず

○順庵はじめ加賀侯に仕へ、後幕府に聘せられたり。仁齋は京堀河に私塾を開いて教授せり。

門生無慮三千人といへり。祖來は柳澤氏に仕へたり。

○益軒の著には文訓・武訓・樂訓・童子訓などあり。白石は古史通・讀史餘論・藩翰譜・折たく柴の記などを著せり。

○水戸の修史に與りしものには安積澹齋・栗山潛鋒等知名の士多かりき。

として別に古學を立て、その子東涯博覽にしてよく父の學を祖述せり。荻生祖來江戸にあり、また朱子學を駁して古文辭學を立て、仁齋父子と東西に對峙せり。

益軒と白石 筑前の士貝原益軒も當時の碩學なりき。性謙讓にして博識を衒はず、書を著すや概ね平易懇切にして實益あらんことを期せり。江戸の新井白石は家宣及び家繼に仕へて政務に參與せり。學博く識高く、有益の著多く、行文犀利にして透徹せざるところなく、眞に古今を通じて稀なる文豪なりき。

水戸の學問 この時代に於て和漢の文學に大功ありしを水戸侯徳川光圀とす。光圀は家康の孫なり。明の遺臣朱舜水を聘して學を講ぜしめ、また修史の念篤く、彰考館を開き、儒臣をこゝに集めて大日本史を撰せしめたり。その學の重んずるところ

○當時多くの國文註釋書を編して初學に便を與へしを北村季吟とす。季吟は貞徳に學べり。源氏物語湖月抄・枕草紙春曙抄など今に行はるゝが、從來の説を繼めしまでにて新しき研究あるにあらず。江戸には戸田茂睡始めて歌道の革新を唱へしが、未だ大なる反響なかりき。

○春滿は山城稻荷神社の祠官な

大義名分を正すにありき。
 國文學の勃興 光圀古典の研究に志あり、殊に萬葉集の解し難きを遺憾としてその註釋を計れり。時に大阪に下河邊長流あり、古文に通じ、中古以來の僻説を捨てて先人未發の見を立てたり。光圀の依託を受けて、かの註釋に従事せしが終らずして歿し、釋契沖その業を繼げり。契沖は眞言宗の僧にして國文學を好み、造詣至りて深く識見世に絶せり。その著述少からざるが中に、學界に大影響を與へしは萬葉代匠記と和字正濫抄となり。代匠記は即ち光圀の囑に應ぜしものにして、偉大なる奈良文學はこゝに始めて闡明せられたり。正濫抄は中古以來假名遣の誤れるを正せる書なり。
 春滿の國學 や、下りて享保の頃荷田春滿かだのあづまらあり、深く國史律令

り。幕府に請うて伏見に國學校を起さんとせしが成らざりき。

に通じ、從來古書を説くものの佛教或は儒教の意を迎合せしを非とし、國民の固有の性俗を明むるを以て己が任とせり。いはゆる國學とて古典を究めて國體のあるところを學ぶはこの人に起れるなり。幕末の際勤王攘夷の説の沸騰せしは、水戸の學と國學との感化與りて力ありき。

芭蕉の俳諧 學問の方面に於ける文運の進歩は凡そかくの如くなりしが、純文學の發達は更に著しかりき。俳諧には、伊賀の人松尾桃青(芭蕉翁)京に出でて北村季吟に學び、後江戸に來りて正風を起し、また東西に周遊してその風を擴めき。蓋し從來の俳諧は内容の見るべきものなく、多くは措辭の上に滑稽を弄するに過ぎざりしが、桃青起るに及びてその地位を高くし、造化の祕を發くを以て歸趣とせり。詠ずるところ人事よりも自然に

○桃青の門人の中、其角は江戸にありて江戸座を起し、嵐雪も江戸にありて雪中庵と稱せり。森川許六は彦根に、向井去來は京に居り、東花坊支考は美濃風、岩田涼寛は伊勢風を開けり。

多く、幽玄清淡にして廣く雅俗に互れり。四方翕然として靡き、俳諧これより遍く都鄙に行はるゝに至りき。門人には、豪放なる榎本其角、溫和なる服部嵐雪をはじめとして、俊秀の士諸國に多かりしが、師歿して後は各、その好むところによりて説を立て、彼此對立して統一を失ふに至れり。

ふる池や、蛙とびこむ水のおと。

桃 青

荒海や、佐渡によこたふ天の河。

同

聲かれて猿の齒しろし、峯の月。

其 角

梅一輪、一輪ほどのあたゝかさ。

嵐 雪

浮世草紙 戯曲・小説は殊に急速なる進歩をなせしが、その作多

○西鶴は大阪の人。宗因に學んで俳諧をよくせしが、後移りて小説を作れり。その後、京の書賈八文字屋自笑また江島其磧と力を合せ、西鶴に倣うて小説を作れり。いはゆる八文字屋本なり。

くは大阪に出でたり。この地は商賈の占むるところ、この時代に至りて豪富の商賈多く出で、町人も社會に於けるその勢力を自覺して、こゝにその間に行はるゝ文學は開けしなり。されど、此等の階級には儒教及び武士道の制裁も薄ければ、その文學もおのづから趣味低くして、輕佻浮華の風を帯びたり。小説は井原西鶴出でていはゆる浮世草紙を作りき。文章輕妙奇抜にして法格に拘らず、寫實的に社會の表裏を描き出せり。戯曲の全盛 戯曲は謠曲などより出で、江戸幕府創立以前より既に行はれしかども、なほ拙劣なるものなりしが、この時代に至りて隆盛を極めたり。元祿の頃、近松門左衛門あり、京に住み、後大阪に移りて盛に戯曲を作れり。寫すところ人情の祕奥を穿ちて才藻湧くが如く、その作百種の外に出づ。次いで竹田出雲

あり、文才は門左衛門に及ばずといへども、趣向の變化に富むことは却つて勝り、今日もなほ行はるゝはその作に多し。

曾我會稽山の一節

門左衛門

ひつたてんとする所に、五郎時致何としてか見つけけん、坂を下りに駈け來り、列卒の兵五六人、ひつつかんで手鞠の如くうちつけうちつけ、團三郎が繩も皮もひきちぎり、八幡四郎をはたと蹴倒し、どうとふまへ、梢も搖ぐ大音にて、鹿の皮かづきし人を鹿と見るは、おろかの眼力、曾我五郎時致は、形は人にて魂の鹿をよつく見る、鹿こそ通れ、十郎殿、おりあひたまへ。」とよばはれば、祐成績いて走りつき、兄弟揃うて珍しき對面と、太刀の柄に手をかくれば、祐經が郎黨、主をうたすな餘すなど、二重三

重にかけへだて、ひつつゝんでたち騒ぐ。團三郎割つて入り、「ア、く、旦那、龜忽なされな。今日のお命團三郎が預る。御一生の大事の御使、古郷の御老母、一昨日の夕暮よりにはかの御病氣、次第に重り、唯今も測られず、千に一つも御本復あるまじき御覺悟、今生の名殘、兄弟に一目對面せん、萬事をふりすてたち歸れ。これに背かば、時致は元の如く、十郎もろとも生々世々の勘當と、たえく弱る御聲を聞きすてて駈けつけし。」と聞くよりはつと力も落ち、兄弟目と目を見合せて、寢ぬに夢みるこゝちなり。「ア、御思案どころでなし。京の小四郎の不所存人さへ、ひつ添うて看病、この人にお二人が孝行劣りたまひては、冥途までの御恨、天の冥加も恐ろし。祐經殿に和を乞うて、おたちく。」と勸むれば、祐經大きに力を得、これく兄

弟、父の河津は流矢に中りしとも、俣野五郎が討ちたりとも、分明ならぬ親の敵、さしあてて祐経を狙ふとな。よし、さもしげにいひわけはすまじいぞ。サアうちかけよ、きりかけよ。音にきく程にもなし。怯れたか曾我殿原」と足許見たる廣言、五郎たまらず、神妙候、祐経」と踊りいづるをおしとぐめ、母の便を何ときく。狂亂か、弟。「いや、微塵こつはいになれ。ばとて、敵に聲をかけられ、すごくたつては骸の恥辱、放されよ、十郎殿。「ヤイ身の譽も恥もすて、娑婆と冥土の父母を喜ばせ奉らんと、幼少より今日まで兄弟が念願、はや忘れしか、時致。「ハツアさうぢや、エ、残念至極、くちをしい、祐成殿。「無念な時致。淺ましき曾我の運命や」と涙の齒ざり身をふるはし、握りひしぐ太刀の柄、ぬきかけ、はつしと鏢打は、鉏、切羽も

一時に碎け散るべう見えてけり。……母のいたはり心ならず、參會はかさねて」と立たんとすれば、暫く。孝行のほど感じ入る。祐経も一家の端、外のやうには思はず、北海道は遠ければ、山路の近道いそぎのため、某が祕藏の名馬、狩場まで引かせしを、兄弟に餞別せん。外道鞆毛、婆羅門栗毛、これへ。」「あつ」と答へて引きいだす。その長八寸あまり、肉十分に節高く、沛艾に口こはく、乗入もせぬ野髪、馬、一様の鞍、皆具、遣繩、追繩、口取繩、つらを振れば、六人の舍人もよろめきひつたてられ、前脚かいて齒をたき、人を嚇して鼻嵐、鬣よりもる、眼の光、角なき鬼の如くなり。兄弟きつと目くはせし、必定この馬に駈け落させ、殺すか、不具か、恥か、せん謀。辭退せばなほ恥辱と、……ひるむところを引寄せ、ひらりと打乗つて、兄弟鎧ふ

んばつて、銜くわを並べひかゆれば、祐經案に相違して、唯うつかりと大口を、あきれはててぞ見えにける。祐成勇めば時致きはひ、ヤアノ、團三郎、汝はこれより秩父殿和田殿、その外の方々へ一禮申して、假屋をしまへ。サア來い、五郎。いざござれ、十郎殿」と、一鞭くれて乗出すも、日脚も速き午未、わが身の運も上刻と、八卦うらかた八つ響く、鐘にさそはれ風さそふ、朽木の櫻春すぎて、また何時いの世の花をだに、待つにかひなき曾我の里いたはしや母上は、河津に別れしゆふべより、二十餘年の物おもひ、貧しき上に世をしのぶ、兄弟の子の成人を、急ぐは親の老と死を、急ぐと知らで身につもる、雪をれ松のむずをれに、にはか病の萬死の床、たのしみは似ぬ孫晨が、藁屋の紙帳もりくる風、そよと寝がへり息つぎも、今を限りときこえけり。

三 寶曆前後

——二四〇〇頃より二四五〇頃まで——

文運東遷 幕府の創立と共に政權は江戸に移りしが、人文の發達は直ちにこれに伴はざりき。前期までは江戸にも著名の文學者はありしが、なほ少數にして、概するに文學殊に純文學の中心は京阪にありき。然るに形勢は漸く移り、この時代は即ち文運東遷の過渡期にして、次期に及びては榮枯處を替へ、京阪は全く江戸に及ばざるに至れり。

國學の傳播 文運の東遷に力ありしは、荷田かひたま在滿ざいまん賀茂眞淵を主とす。在滿は春滿の甥にして、制度の學に委しく、江戸に下りて家學を弘めき。當時將軍吉宗の子徳川宗武、國學を好みて學者を聘せり。在滿これに仕へしかども、その説宗武と合はず、辭し

○宗武は田安家の初代にて、和歌をよくせり。在滿には國歌八論などの著あり。眞淵には萬葉考・冠辭考・祝詞考・國意考・歌意考など著述多し。

○當時京都にて伴
蒿蹊また歌文に
名ありき。成章
の子御杖も一家
のを見を立てた
り。

て眞淵を以て代らしめたり。眞淵は遠江の人、京に出でて春満
に學び、後江戸に來りて講説し、宗武に仕へたり。その學は春満
に繼いで我が國固有の道を明にするにありき。謂へらく、むか
し儒佛の教の傳はりしより、古道はこれがために廢れたり。故
に古道を明めんとせば、外國の影響なくして人意の自然に出で
たる古書を學ばざるべからず。その古書は萬葉集最も善しと、
よりて深くこの書を究めき。識見甚だ高かりしといへども、詩
文の才は寧ろ學問にまさりき。たゞ萬葉風の古文辭を用ひて、
却つて技能の發展を妨げしを憾むべしとす。門下に高材の士
多くして、これより國學の勢天下を席卷するに至れり。八文の
京都の情況　されど、京都にもなほ國文學に名ある人少からざ
りき。小澤蘆庵は和歌に長じ、眞淵に反して、平語を用ひて清新

の調をなせり。富士谷成章は文法に通じたり。

富士山をよめる長歌一首及びその反歌

眞淵

磯間よりそがひに見ゆる、駿河の海、おきつ波路はせばきかも。
ふりさけみれば相模嶺の、八重山峯は低きかも。天の原なる
富士の嶺の麓をいでて、風のまに横ほる雲に、駿河の海おきも
かくろひ、相模嶺の峯も雨ふり、時のまに雷もなりゆけど、六月
の照る日の空にあらはれて、曇るともなく、常夏に雪ぞふりけ
る、富士の高嶺は、

駿河なる富士の高嶺は、雷の音する雲の上にこそ見れ。

富士の嶺の麓をいでてゆく雲は、足柄山の峯にかゝれり。

當時の短歌の例

信濃なるすがの荒野にとぶ鷺の翅もたわにふく嵐かな。

真淵

大堰川、月と花との朧夜に、ひとりかすまぬ浪のおとかな。

蘆庵

○蕪村は攝津の人。京に住めり。また畫をよくせり。也有は尾張侯の臣。その俳文集鶉衣世に行はる。

俳諧の革新 俳諧は都鄙に互りて廣く行はるゝにつけて、時好に投じ風調甚だ卑俗に流れき。天明の頃更めて清新の風を詠ずるもの起れるが中に、谷口蕪村を最とす。蕪村好んで自然の景物を詠じ、また漢詩の趣を交へたり。桃青と相並んで斯道の二聖とすべし。横井也有は俳文をよくし、その文淡雅輕妙なりき。その後俳諧なほ遍く行はれしが、漸次俗了するのみなりき。

石工の鑿ひやしたる清水かな。

蕪村

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな。

同

○秋成は京阪に放浪し、凌岱・鳩溪は江戸に住みたり。秋成の雨月物語最も世に知らる。

戯曲・小説 戯曲・小説は京阪の間には見るべきもの少く、江戸には青本といふ小説漸く發達し、兒童の玩具より進んで世態人情を穿つに至れり。されど、文學上の價值より見れば、數多き青本の作よりも、寧ろ上田秋成、建部凌岱を重んずべし。二人は何れも國文學の知識を基礎とし、漢文學をも折衷して小説を作れり。平賀鳩溪また奇才を抱いて世に容れられず、戯曲戯文を綴りて悶を遣りたりき。

四 文化文政時代

—二四五〇頃より二五三〇頃まで—

松平定信 元祿は京阪の文華の燦爛たりし時代にして、文化・文政は江戸の最も光彩ありし時代なり。文學に大功ありし人、彼に徳川光圀あるが如く、此に松平定信あり。定信は徳川宗武の子なり。將軍家齊立つに及びて老中となり、後致仕して樂翁と號し、文學を樂しみて晩年を送れり。その政を執るや力めて風紀の振肅を計り、道德的觀念を以て學問・文學を律したり。

異學の禁 儒教に於ては林家代々幕府に仕へて朱子學を立てたり。この學に抗して曩に古學・古文辭學出でしが、その後折衷學も起り、黨を分ちて相争へり。定信黨同伐異の俗が風教に害あらんことを患へ、林家の私學を幕府の有とし、林述齋をしてこれを統べしめたり。また朱學を奉ぜざるものは官職に就くこ

○折衷學は井上金峨・山本北山・大田錦城等これを唱へたり。官學は即ち昌平坂學問所なり。述齋を依けてこれを經營せしものに柴野栗山・古賀

精里・尾藤二洲あり。世に寛政の三學士と稱す。

とを得ざらしめたり。これを異學の禁といふ。

東西の風潮 寛政より文化・文政の頃までは、江戸の繁華絶頂に達し、市民は泰平の化に浴して撃壤鼓腹せり。然るに、京都はこれに反して、皇室は幕府に壓せられ、攝關清華の家も貧しく過せば、國學の開けて古代王朝の盛大を知るにつけても、當今の非運を慨せざるを得ざりき。この形勢の相違はさながら文學に影響し、江戸の文學は泰平を謳歌して不平の念の見ゆること稀なるに、關西には、頼山陽の如く、鬱勃の情禁じがたく、尊王愛國の主義を鼓吹するもの少からざりき。

本居宣長 賀茂眞淵起りてより國文學の勢盛に、殆ど漢文學を壓せり。その門人多きが中に、關西の本居宣長、江戸の加藤千蔭、村田春海等最も名ありて、その學風の異同はまた東西の形勢の

○宣長は松坂の商家に生れてその地に住めり。博覽を以て鳴り、著述甚だ多し。隨筆玉勝間など殊に世に重んぜらる。篤胤は秋田の人。江戸に住めり。晩年幕府に忌まれて國元に送られき。

○千蔭の家集をうけらが花といひ、春海のを琴後集といふ。

相違を示せり。本居宣長は伊勢の人。その學一に古道を明むるにあり。古道を知るには古事記最も貴ぶべしとして、その註釋に従事し、三十五年を歴て業成れり。即ち古事記傳にして、以てその深遠なる學と穩健なる見とを知るべく、實に契沖の萬葉代匠記と併せて、江戸時代國文學界の二大作なり。宣長にはなほ多くの著述あり。殊に文法に通じて詞の玉の緒などを著せり。門流甚だ盛なりしが、歿後の弟子平田篤胤最も名高し。篤胤の唱ふるところは宣長より一步を進めて、古道を以て一の宗教とし、これを弘布して儒佛の教を斥けんとするにありき。勤王攘夷の説は此等の論によりてますます、刺戟せられたり。千蔭春海 加藤千蔭、村田春海は共に江戸の人。歌文をよくせしかども、學問は宣長の博きに比すべくもあらざりき。千蔭は

冬日同詠濱邊寒蘆

味歌

東五侶

只砂久きよし上
乃濱辺風をうん
浪もよき休浪社
和連 弟

蹟筆 滿春田荷

此はくまのふのこわう
ほやふふてはくきてはあふよ
て七十といひこをばそすて
毎年の言もさうもさういふ
机を成今大さくふゆりて
ほくもあふ
年成経てはねつらふ
不登しよりせしむるも
はくもよ

寛政十二年正月

宣長

蹟筆 長宣居本

あつとてふあやのうらや
 きののうあつとてふ
 神やうまうま

蹟筆淵真茂賀

思ふ存て家のは
 このつりは

花鳥字も名を見たり
 あ波水を歌ふいと無字利

篤胤

蹟筆胤篤田平

萬葉集略解の著を以て著れ、春海は漢文にも併せ通じ、和漢の文を折衷して一體をなせり。この二人の詠ずるところの和歌は、その師の如く萬葉の調にあらずして寧ろ古今に則りたり。

塙保己一 江戸は日本一の都會となりて珍品奇什こゝに集りたれば、書籍もまた求め易かりき。されば、生活の豊かなるに安んじて圖書を蒐集し、訓詁考證に専らなる學者も少からざりき。盲人塙保己一は眞淵の門より出づ。幕府に建議して和學講談所を設け、古書を集めて群書類従及びその續篇を編したり。

江戸の狂歌 狂歌は詞の卑俗に想の滑稽なる短歌なり。既に萬葉集に滑稽の歌あり。それより往々これを詠ずるものありき。江戸幕府の世に入りては殊に行はれしが、前期の末よりこの時代にかけて江戸の泰平はその振興を促し、狂歌師一時に江

○赤良は太田南畝にして、近世の雑事に通じたる學者なり。その門人宿屋飯盛・北川眞顔また狂歌をよくせり。飯盛は石川雅望といひ、國文學に通じたり。○景樹は鳥取の人にして京に住めり。貫之を崇び、その著に古今集正義・土佐日記創見などあり。家集を桂園一枝といふ。門人に熊谷直好・八田知紀(とものり)等あり。

戸に輩出せり。中にも四方赤良最も滑稽の才に富み、戲謔口に任せて出でたり。

京都の和歌 翻りて京都を見るに、文壇頗る寂寥なりしといへども、なほ香川景樹の歌道を一新したるありき。その説小澤蘆庵に近く、意は古の誠實なるに倣ひ、詞は今の通じ易きを取り、殊に聲調を重んずるにありき。景樹の號によりてその一派を桂園派といひ、大いに行はれたり。

當時の短歌及び狂歌の例

しきしまの大和心をひと問はば、朝日ににほふ山櫻ばな。

宣長

二見潟、こちふく風に明けそめて、神代の儘の春は來にけり。

千蔭

心あてに見し白雲は麓にて、思はぬ空にはるゝ富士の嶺。

春海

大堰川かへらぬ水にかけみえて、今年もさける山櫻かな。

景樹

時鳥なきつる跡に、あきれたる後徳大寺のありあけの顔。

赤良

歌よみは下手こそよけれ、天地の動きいだしてたまるもの

飯盛

かは。あらしはぬ風の柳のいとにこそ、堪忍袋ぬふべかりけれ。

眞顔

○京傳・馬琴は讀本(よみほん)に名を得たり。讀本の行はるゝに至りて小説も高尙なる境に進めり。京傳の讀本には稻妻表紙・本朝醉菩提などあり。
一九の作は東海道中膝栗毛、三馬の作は浮世風呂最も名あり。

江戸の小説 江戸には小説勃興し作者輩出せしが中に、山東京傳早く許多の作を出して名聲一時に鳴れり。曲亭馬琴次いで立ち、學問該博にして文藻絢爛なりき。椿説弓張月・里見八犬傳など、その作の人口に膾炙せるもの多く、一篇出づる毎に世人争うてこれを求めて及ばざらんことを恐れき。時に前期より享保の振肅も弛みて、世風漸く浮華奢侈に流れしかば、執政松平定信等これが矯正に力めて、文學の風俗を壞り時事に渉るものを制せり。一時これがために罪を得しものあり。京傳もその數に漏れざりしが、ひとり馬琴は謹嚴にして高く居り、その小説も一に儒教によりて勸善懲惡を旨とせり。その他の作者の中、殊に滑稽に名を得たりしは十返舎一九式亭三馬なりき。

里見八犬傳の一節 (小文吾諷諫して高く舟水を論ず)

引かれて對牛樓に打登れば、常武は婢兒等に雨戸おちなく開かせたり。當下、小文吾はまづ頭をめぐらして彼此と見かへるに、樓上の東面には、僧一山が款印ある對牛彈琴といふ四字の額を掲げて、左右には、唐の王勃が蜀中九日の詩を白字に鏤りたる竹聯あり。時は今夏と秋との違あれども、犬田がためにはこゝも亦望郷の臺にして、北地よりくる鴻雁はなけれど、いざ言とはんと詠まれたる都鳥は今もありけり。かくて欄干に身を倚せて、つくづくと見わたせば、天ははやあけし横雲の色紙めきたるに筆はなけれど、誰が硯せし墨田河、前面に黒き牛島は、宛も水に臥せるが如く、彼方に蒼き柳島は、絲よる濤に靡くに似たり。世間は何に譬へん朝びらき、趾なき如と

満誓が詠みたる歌は白波に、漁翁生涯一葉の舟、東へ漕ぐあり、
 西に歇かるあり、葛西村落幾戸の烟、南に沖たつあり、北に滅きゆるあ
 り、鎌田・浮田・行徳の浦々、あれかとぞ思ふ目も迥はるに、登る旭をふ
 る里の方とし見れば翁さびし、父のうへまた親戚うぢのこと、胸に
 湛へて長らふる、かひこそなけれ、劔刀、身を浮橋の中絶えし、こ
 の石濱の玉塵たまごより、數しつもれる艱難憂苦の、やるせは絶えて
 なかりけり。常武これを慰めて、犬田殿、犬田殿、いつまで物を
 思ひたまふぞ、尺蠖さくわくの伸びんとする時、まづその身を縮むと
 いへば、窮達時あり、運によるべし。あれあの船を見たまはず
 や。久しう水際に繋がれたるあり、また眞帆あげて走るあり。
 繋ぎし船は走るべからず、走る船は留りがたし。和殿が今の
 滞留も、只この理をもて悟るべし。これを我が上に譬へてい

はば、君は船なり、臣は水なり。水はよく船を浮べて、またよく
 船を覆す。自胤は暗愚の弱將、菽麥をだも辨へ得ざれば、いか
 でか和殿を知るものならん。かの隣國なる敵のために滅さ
 れんこと疑なし。某もまた千葉の一族馬加光輝まかみつの姪なれば、
 代つて取るとも誰か咎めん。されば、享徳の例に倣うて、自胤
 に詰腹切らせ、我が兒鞍彌吾常尙つねひさを當城の主にせばやと、思は
 ざるにあらねども、未だ智勇の軍師を得ず。和殿今より我を
 佐けて、事成る時は葛西の半郡を宛て行ふべし。うけひかれ
 んやと小膝を進めて、また他事もなく囁けば、小文吾聞きて貌
 を改め、こは思ひがけもなき密議を談ぜらるゝものかな。某
 素より學問せざれば、聖の教はよくも知らねど、譬を取りて利
 害を推さん。貴所は只水と船との反覆を説きたまへども、順

逆の理に暗きにあらずや。いかにとなれば、水の船を浮むるは經つらなり、その船を覆すは變かはなり。苟くも只その變を己が利として、その經を取らざるものは、亂臣賊子の心なるべし。君臣禮あり、舟車に楫あり。君臣禮を失ふときは、舟車に楫を矢ふが如し。一旦その利を得るといふとも、滅亡せんこと疑なし。その君を弑せしもの、誰かその久しきを保ちたる。希望こゝろがほくは非義の妄想を除き去りて、千葉家の諸葛といはれたまはば、徳誼後世に芳流して、子孫餘慶を承くることあらん。某武藝を好めども、短才にして文學なし。いかでか人の佐となるべき。たゞその志す所は、忠信の狗となるとも、亂離の人とならじとのみ、念ずるの外は候はずと、憚る氣色もなく答へしかば、常武は勃然と怒は面にあらはれても、手を叉きて物いはず。

幕末の衰勢 嘉永以後は、幕府勢を失ひて列藩これに服せず、歐米諸國しきりに開港を迫り、志士諸國に奔走して、勤王の論と佐幕の説と相争ひ、世の中甚だ騒がしく人心恟々たりしかば、文學の見るに足るものなかりき。かゝる中に明治維新の世は來れり。

第三章 明治大正の世

—二五三〇頃より二五八六まで—

階級の破壊 明治の維新は未曾有の改革にして、社會のあらゆる事物は非常なる變化をなせり。その種々の變化の中、まづ一世を聳動せしを階級制度の破壊とす。職業の世襲は止み、四民は平等にして、たゞその才能によりて進めば、文學に於ける上下の區別も消失せざるを得ず。上流社會に根ざせる保守の弊は失せて、前代には中流以下にのみ玩ばれし俳句・戯曲・小説の類も遍く貴賤の間に行はれ、高尚なる文學の品位は始めて明に認めらるゝに至れり。

歐米文化の移植 維新の改革は歐米文化の移植によること多かりき。太古以來久しく儒佛二教の感化を受け、社會はこれが

指導の下に立ちて進歩し來りしが、今や翻然として東西兩洋の優劣を知り、力めて優秀なる西洋の文化を學べば、國民の思想は諸般の事物と共にその影響を被れり。

國民性の發揮 然れども、現今の文運の進歩は決して外國の事物を移植するのみによりて成れるにあらずして、その本づくところは國民が自己の能力を自覺し發揮せしにあり。悠久なる我が歴史は、その民の智能を育成して深く蘊蓄するところあり。またよく物の本末を辨へ、漫然たる模倣の益なきを覺らしめたり。かくして我等は國民の特性を基礎とし、外國の文化の長短を取捨してこれを彩り飾れるなり。

形式の改善 國民の自覺と外國文化の折衷とによりて、我等の思想は著しく進歩し、文學もこれに伴うてその形式は内容と共に

に大なる變化をなせり。國文學と西洋文學と併せて研究せられ、文字の改革を論ずるものあり、言文の一致を唱ふるものあり、新進氣鋭の士は從來の歌文の陳套なるに飽きて新體を試みるもの多く、文壇は漸次隆昌の度を加ふるに至れり。

口語體の文章 右に述べたる諸の新現象の中、文學上まづ注目すべきは口語體文章の發達なり。口語體文章は明治二十年の頃、山田美妙齋と二葉亭四迷とが小説に用ひしを以て嚆矢となす。當時はこれを言文一致體と稱せり。爾來この體漸く發達し、ひとり小説のみならず各種の文學に用ひられ、今や詩歌の如き韻文にも用ひらるゝに至れり。

寫實の精神 明治・大正の文學に遍く通ずる著しき精神は現實の描寫といふことなり。坪内逍遙が明治十八年に小説神髓を

著して人情の模寫といふことを唱へしをはじめ、尾崎紅葉等の小説、正岡子規等の俳句に、寫實と言ひ寫生と稱せしは皆この精神に出づ。明治四十年頃に至りては、小説はいふまでもなく詩歌も戯曲もすべてこの風を帯びたり。

詩歌の新風 蕪村以後俳諧は沈滞して振はざりしが、明治二十七八年の頃復興して新面目を發揮せり。但し、俳諧の連歌は未だ起らず、發句のみ盛にして、稱して俳句といへり。正岡子規その唱首たり。その後自然主義の思潮文學の各方面に彌漫するに及び、俳句もまた益、現實描寫に傾き、直接經驗に基づき、傳統の形式によらずして自由なる句法を用ふる派を生ずるに至れり。河東碧梧桐、萩原井泉水等これなり。短歌は桂園の舊風久しからずして萎靡し、各種の新體並び起れり。子規は俳句運動完成

後短歌の革新に着手し、寫生を標榜して實感實情を重んずる點より萬葉集の作風を推稱し、伊藤左千夫、長塚節等これに従ひ、島木赤彦、齋藤茂吉等これを繼承して今日に及べり。明治三十四五年の頃與謝野晶子出で、四十四五年の頃石川啄木出で、最も著る。俳句短歌共にその形式を自由にし、その内容を複雑清新にし、或は客觀寫生に勉め、或は實感實情を抒べ、主として作家の直接經驗するところを詠出せり。

新體詩の興起 新體詩は泰西の詩形に倣ひて作れる新體の詩歌にして、明治十四五年の頃に創まれり。二十八九年の頃、島崎藤村、土井晚翠、薄田泣菫等出づるに及び、ほゞその體をなし、我が詩歌の一體として重きをなすに至れり。爾來或は口語を用ふる口語詩となり、制約を解ける散文詩となり、或は晦澁なる象徴

詩となり、平易なる民謠詩となり、以て今日に及べり。

現代の小説 明治大正の文學の中最も盛況を呈せしは小説なり。二十年の頃に出初めたる寫實主義の小説を先頭として、心理描寫の小説、俳諧趣味の小説、自然主義的小説などこれに次ぎ、更に耽美主義的、人道主義的の作品の出づるに及ぶまで、その數量の多き、また作家の輩出せる、遂に他の文學に超えたり。而してその描寫するところは主として現代生活の真相に在りて、傳奇的または理想的の世界に着想すること少かりき。

小説の作家 坪内逍遙、二葉亭四迷、森鷗外等は、評論または創作翻譯によりて小説の新風を興すに力め、尾崎紅葉、幸田露伴、樋口一葉、國木田獨步、田山花袋、夏目漱石、島崎藤村、徳田秋聲、正宗白鳥等は、専ら作家として著れ、各その長ずるところに従つて現代の

小説を進歩せしめたり。
戯曲脚本 江戸幕府の世に榮えたりし操りの淨瑠璃はその後漸く沈衰し、歌舞伎の脚本これに代りて次第に發達せり。明治二十七八年の頃、坪内逍遙史劇の革新を論じて新作を出ししより、脚本の時代物は從來の夢幻荒唐の作風を離れて、他の文學と等しく現實を主とするに至れり。なほ逍遙、鷗外をはじめ泰西脚本の翻譯をなすもの多く、爾來革新の潮流は脚本の世話物にも及び、創作も數多出で、作家も輩出し、世上各般の事象を取扱ひてその實相を描出せんとせり。所謂社會劇これなり。
評論及び評論家 明治大正の世に於ける注目すべき新現象の一は、新聞雑誌の出現に伴ふ評論の發達と、これを以て一家をなす評論家の輩出となり。評論はその題材、文章の如何により文

學と稱すべからざるものもあれど、その中おのづから文學の體裁を具ふるものあり。特にその題材の専ら文學に關するもの即ち文學評論は、新興文學の中にありて頗る重きをなせり。徳富蘇峰、三宅雪嶺等は一般評論家として知られ、坪内逍遙、森鷗外、高山樗牛、島村抱月等は文學評論を以て著聞せり。
國文學の前途 明治大正の世に於ける文學の景況、凡そかくの如し。維新以來新に覺醒したる國民は、まづ衣食住の改善に忙しく、工藝に勵み交通を便にするなどのことに急にして、文學の進歩はやゝ緩やかなりきといへども、今や文物日に進み、人心に餘裕を生じて、國民は漸く高尚なる文學を享樂せんことを思ふかくして、我が帝國が東西兩洋の文學の二大潮流を融化し、光輝ある文學を以て世界に雄視せんとする氣運は正に迫れり。

新體 日本文學史教科書 終

（以下は表紙裏の透り書きの文字）
 日本文學史教科書 終
 藤岡作太郎 著
 藤井乙男 著
 東京開成館 發行
 東京小石川區小日向水道町八十四番地

新體日本文學史教科書



定價 四拾六錢

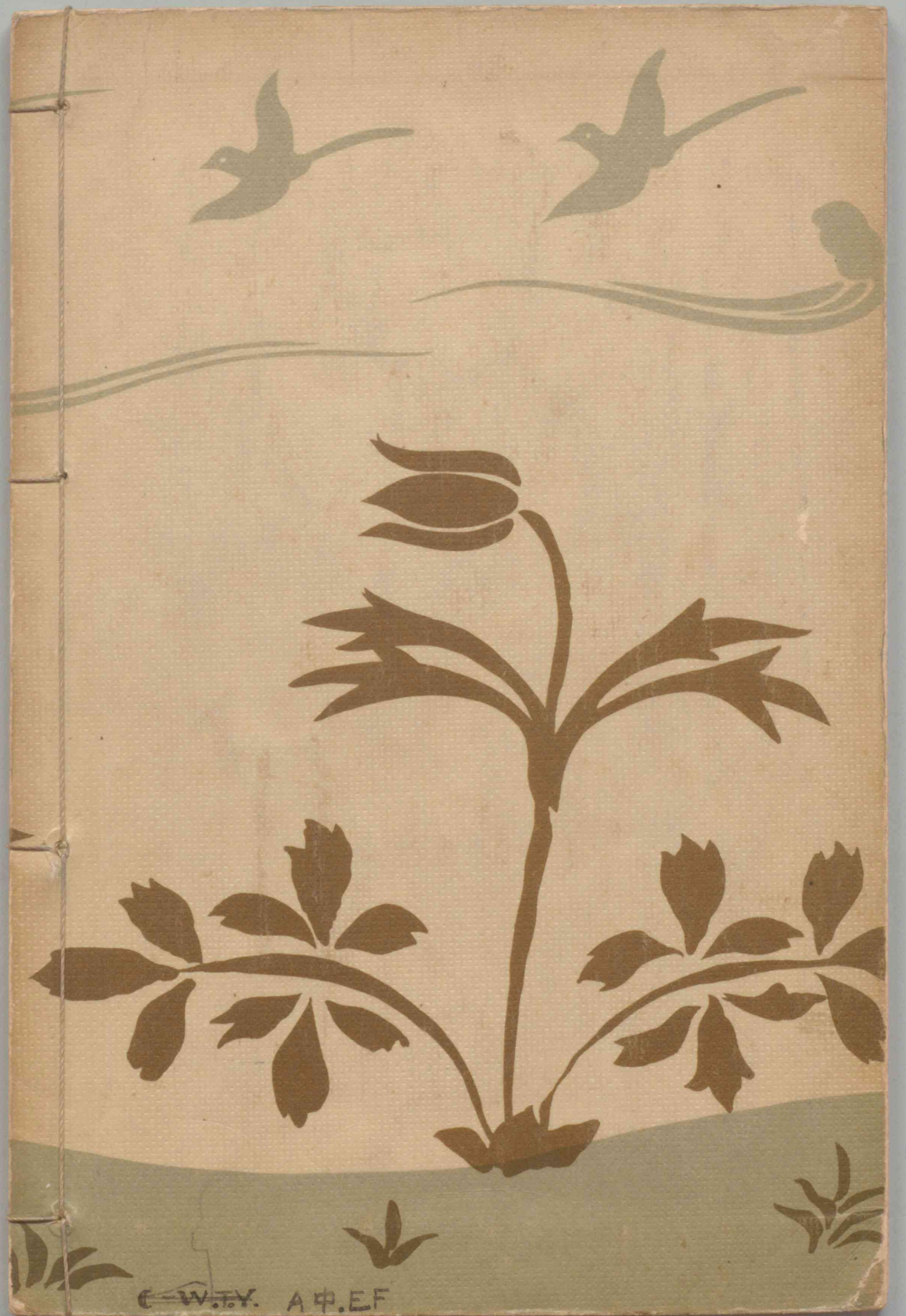
發行所

東京市小石川區小日向水道町八十四番地

株式會社 東京開成館
（振替貯金口座）東京第五三三三番

| | |
|-----------------------|-----------------------|
| 明治三十七年七月十一日發行 | 明治三十七年九月十五日發行 |
| 明治三十七年七月十一日再發行 | 明治三十七年九月十五日再發行 |
| 明治三十七年七月十一日修正發行 | 明治三十七年九月十五日修正發行 |
| 明治三十七年七月十一日修正再發行 | 明治三十七年九月十五日修正再發行 |
| 明治三十七年七月十一日修正再再發行 | 明治三十七年九月十五日修正再再發行 |
| 明治三十七年七月十一日修正再再再發行 | 明治三十七年九月十五日修正再再再發行 |
| 明治三十七年七月十一日修正再再再再發行 | 明治三十七年九月十五日修正再再再再發行 |
| 明治三十七年七月十一日修正再再再再再發行 | 明治三十七年九月十五日修正再再再再再發行 |
| 明治三十七年七月十一日修正再再再再再再發行 | 明治三十七年九月十五日修正再再再再再再發行 |

| | |
|-----|------------------------|
| 著者 | 藤岡作太郎 |
| 著者 | 藤井乙男 |
| 發行者 | 株式會社東京開成館 |
| 發行者 | 代表者 松本繁吉 |
| 印刷者 | 東京市小石川區西江戸町二十一番地 佐々木俊一 |



C.W.Y. A.P.E.F.